
僕が僕である為に

宇治金時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が僕である為に

【Nコード】

N0098T

【作者名】

宇治金時

【あらすじ】

戦闘に秀でた人員を養成することを目的に創立された戦技高校。複数ある戦技高校の一つ中央戦技に在学する峰岸はその日、嫌々ながら入学式の警備に当たっていた。怠慢な警備をする峰岸はその最中に、転校生の少女と出会う。道に迷ったというその少女を目的地まで送り届けるのだが……

起（前書き）

あらすじが雑だと思った人。その通りです。プロットも作ってません。話の大筋を作っただけで書いてしまったこの話。私にもどうなる事やら分かりません。はつきり言ってノープランです。

更新日不定なこの話ですが、長い目で見守ってくれるとありがたいです。

起

戦闘に優れた人員を養成する為、二二二五年に創立された中央戦技高校^{せんぎこうこう}。今年で創立一〇周年になる。その日は例年と同じように、入学試験に合格した新入生が入学式に出るため、数々の演習場が存在する演習場エリアに長い列を作っている。普段は戦闘訓練等を行うエリアであるが、その広大なスペースは式典にも利用される。

中央戦技は一応高校というカテゴリに分類される施設であるからして、演習場だけでなく複数の学科塔が建ち並ぶ学科エリアも当然ながら存在する。さらにそれらの生徒を住まわせる為の生活エリアなどもあり、用途ごとにエリアが分割されているのが特徴といえば特徴だ。

本日は入学式ということもあるので、どの生徒も白い軍礼服を着ている。男子はズボン、女子はスカートを穿いている。肩には園籐脂色の飾紐がついた校章が付いていて頭には制帽を被っている。式典の時ぐらいいしか着られる事のない中央戦技の制服だった。

新入生の作る列から少し離れた場所に置かれたベンチに横向きに寝そべる峰岸龍介^{みねがし りゆうすけ}は片腕を枕代わりにし、空いた片方の手で制帽を指に引っ掛けクルクルと回している。彼も一応制服は着ていたが、眠たげに開かれた眼と癖が強過ぎて四方八方無遠慮、無法則に飛び出すウニの様な頭は、純白の軍礼服のイメージからは程遠い。眠そうな目はぼんやりと新入生の列に向けられている。

峰岸は制帽を回していた方の手でボリボリと尻を搔くと大きな欠伸をした。

「暇だ」

本人はは独り言のつもりで言ったのだが、隣で無然とした表情で立つ白井琢磨^{しろい たくま}には聞こえていたらしい。

「暇じゃない。サボってないで仕事をしろ」

不機嫌な声で峰岸に言った白井の容姿は見るからに優等生といっ

た感じの眼鏡を掛けた少年だった。彼もまた白い制服を着ている。彼はベンチは使わず、寝そべる龍介にの隣に立ちながら後ろで手を組んでいる。背筋は伸ばされ、まるで棒でも入っているかのようだ。「拓真、お前は真面目だよなあ。白井家の人間は皆お前みたいに真面目なのか？」

峰岸は寝そべった姿勢が辛くなったので、体勢を変えてベンチに座り直す。

「お前が特別不真面目なんだ。ちゃんと与えられた仕事をこなせ」彼等が与えられた仕事は会場内の警備だ。名前の通り、中央戦技は色々と物騒な学校だ。運動神経が化け物じみた人間がそこら中を徘徊している。中には家が代々軍人の家系で幼少期より戦闘の英才教育を施された人間もいるわけだ。本日は入学式ということもあり、行儀の良い軍礼服装を着ているが、普段は防弾と防刃効果のある戦闘服に身を包み、両手で突撃銃を大事そうに抱え、にこやかに談笑する女子学生がちらほらいるような学校だ。血の気の多い人間も多く、わりと頻繁に問題の起こる学校でもある。

「大丈夫だって。入学式から問題起す馬鹿なんかいないだろ」

峰岸の言葉を聞いた白井が何か言いたそうな顔になる。

「俺の目の前に、入学式当日に問題を起した馬鹿がいるんだが」

白井が話ているのは今から一年前に峰岸がエリート意識の強い戦略科の新生と乱闘を起した事件のことだった。その時は当時、警備に当たっていた上級生の制裁という名の仲裁で事なきをえた。

「あの時、上級生が止めに入らなかつたら懲罰房送りじゃすまなかつたぞ」

「あれは、あいつ等が他科の人間を馬鹿にしてたからだ。それに俺が特別馬鹿だっただけで、他の生徒もそうとは限らん」

「自分が馬鹿なのは否定しないのか」

「ああ、しないね。入学早々問題を起して上級生や教官に目を付けられるなんて、俺は完璧な馬鹿だ。願わくばあの頃に時間を戻して入学式をやり直したい」

峰岸は頭をバリバリと掻きながら入学式での自分の愚考を悔やんだ。

「懲罰房送りがそんなに答えたのか？」

峰岸がそんなデリケートな人間だとは露ほどにも思わなかった白井の口調は意外そうだった。

「違う。その後だ」

「後？」

「鎮圧部隊に入れられた」

鎮圧部隊、つまり今この入学式警備の任を受け持つ生徒で構成された部隊を鎮圧部隊という。普通の学校でいう委員会が部隊という名前にすり替わった思えばいい。

「なんでだ？名誉な事じゃないか。高い戦闘能力があると判断されないで鎮圧部隊には入れないんだぞ。俺も去年の後期にやっと入る事が出来たんだ」

場合によっては実力で問題を起した生徒を制圧しなければならぬ為、鎮圧部隊の面々にはそれを出来るだけの戦闘能力が求められる。入学式の乱闘騒ぎで峰岸をぶん殴って気絶させたのが鎮圧部隊の人間だったのだ。その後、峰岸は三日間懲罰房送りになったのだが出てきた時には、既に勝手に鎮圧部隊への配属が決まっていた。

この外にも整備や補給等の様々な業務をこなす部隊が存在するのだが部隊配属の生徒は全学年通しても三十%を切っている。その分野で特に優秀な生徒が部隊入りを果たす事になるのだ。部隊に配属された生徒はその事を誇りに思い、部隊の目的遂行の為に全力を注ぐというのが中央戦技生の一般的な考え方だ。簡単に言ってしまうと、一般の生徒より仕事量が増える。格段にだ。

そして峰岸の思考回路は部隊入りの名誉を誇るよりも、自分のプライベートな時間が減る事を嘆くように出来ていた。

「一般の生徒がオフのときですら鎮圧部隊は引っ張り出されるんだぜ。しかも起こるかどうかわからない問題に備えてだ。もう嫌だ。帰りたい。帰って昨日買ったゲームがやりたい」

峰岸がベンチに座りながらばやいた直後、彼の脳天に鈍器で殴られたような衝撃が走った。

「おぐえっ！」

峰岸は奇妙なうめき声を上げながら頭を抑えた。最初は白井の仕業かと思いい横に立つ白井を睨み付けるが、その白井の顔が奇妙に引きつつている事に気付く。

直後に、背後から猫撫で声が聞こえる。

「みーねーぎーしいー」

白井の声ではない。というより男の声でもない。しかし峰岸は自分を呼ぶ猫なで声に嫌というほど聞き覚えがある。誰の声か判別した瞬間に全身が総毛立つ。

「あ、あれ？南野さん。みなみのなぜここに？」

みなみの しずか

恐る恐る振り返る峰岸は視界の端に南野静香の姿を確認した。彼女が峰岸の頭を殴った張本人なのだが、彼女の容姿だけを判断材料にしたのなら、そんなことをするとはにはわかには信じがたい可憐な少女だ。艶の良い長い黒髪は行儀良く後ろで束ねられている。日本人的な切れ長の目は、不気味に微笑み、それと連動するかのよう血色の良い唇の両端を吊り上げている。

彼女との付き合いがそれなりに長い峰岸から見れば怒っているのがまる分かりなのだが、彼女を何も知らない人間が今の光景を見たのなら、さえない男子が、和風美人ににこやかに話しかけられているものだと思うことだろう。しかしながら彼女の外見に何らかの魅力を感じて近付いた人間（主に中央戦技の男子生徒）はその見た目とのギャップに枕を濡らす事となる。

誰が言い始めたかはさだかではないが彼女にまつわる噂の一端はこんな物だ。曰くいわくしつこく、しかもかなり強引に言い寄ってきた戦略科の男子生徒を半殺しにした拳句、『私は卑しいストーリーカー野郎です。ごめんなさい』と書かれた看板を首から下げさせ、総合戦技そごうしんぎ科の学科塔の端から端までを四つんばいで這わせた。曰く自分の写真が高値で取引されていることを知り、写真を買った生徒を締め上

げ、主犯の生徒を割りだすとその生徒を半殺しにした拳句。肖像権を訴え売り上げの七十%を要求した。

真偽の程はさだかではないが、彼女に狙われた生徒は例外なく半殺しの目に遭っている。そして、彼女を一年近く見てきた峰岸はこれらの噂に対してこのように思っていた。火の無いところに煙は立たない。

とにかく関わるとうるくな事の無い危険人物である事は事実なので峰岸としても関わりたくない部類の人物に入る南野だが、そういうわけにもいかない事情がある。

「どうしてってあなた達が会場の警備をサボってないか警備部隊の隊長として見に来たのよ。案の定だったわねこの怠け者供」

なぜなら彼女は峰岸達の所属する鎮圧部隊の隊長を務めているからだ。そして一年前の乱闘の折、峰岸を拳骨で気絶させたのも彼女だった。さらに、峰岸を勝手に鎮圧部隊に推薦したのも彼女であり、彼女と関わった思い出を辿るだけでも泣きそうになるくらい峰岸は南野が苦手だった。

「た、隊長、自分はサボっていません。サボっていたのは峰岸だけです」

必死に自分の潔白を訴える白井を峰岸は恨めしそうに見つめる。

「白井、お前は自分さえ良ければそれでいいのか？白井なあ白井、お前の人生それでいいのか？」

「うるさい、そもそも俺は注意したんだ。お前がいつまでたってもそんな所に座ってばやいてるからこんな事に……」

「いい加減にしなさい」

醜く言い争う二人を止めたのはやはり南野だった。よく通る声なので怒鳴る必要もない。静かに発せられた声だけで言い争う二人を黙らせる。

「あなた達は同罪。怠けていた峰岸も、それを正せなかった白井もね。どっちの責任が重いかなんてこっちはどうでもいいの。とにかくいつ、どこで、何が起こるか分からないんだから、警戒を緩めな

いようと始めに言ったはずなんだけど。去年も乱闘騒ぎを起したお馬鹿な生徒がいたことだし。名前は確か……」

南野に視線を向けられた峰岸はその視線を上手に受け流す大人の対応をしたつもりなのだが、全く上手くいっていない。白々しく口笛を吹きながら、目を泳がせ、額からは冷たい汗が噴出している。

「それは、あれです……俺も悪いと思っっているのですよ。だからこそ本日は、いや本日だからこそ自分の持てる力を全てを出し尽くす覚悟で警備に望む所存であります」

言い終わると同時に敬礼。因みにその時の峰岸は殴りたくなるようなドヤ顔をしていた。

案の定、南野のベアナックルが峰岸の右頬にメリ込んだ。その場で三回転、きりもんだ後、もんどりうつて地面を転げまわる。

「い、痛い」

右頬を抑えながら涙目になる峰岸は何で自分が殴られたのか分からないといった顔。

その光景を傍から見ていた優等生、白井が呆れたように言う。

「お前、今までサボってたのによくそんな恐ろしいことを言えたもんだ」

「サボってねえ。ベンチに座りながら見てたんだ。立って見るのも座って見るのも一緒だろ。だったらエネルギーを使わないで見たほうがいざというときちゃんと動けるだろ」

峰岸は中学生が教師に反抗する時のような屁理屈を言う。もちろんアドリブで考えたものだ。

「それには一理あるけど、見せる警備って言葉もあるんだからちゃんと立ってやりなさい」

屁理屈に腹を立てる様子も見せず、全てを受け流す南野。

「お、大人の対応だ……」

その様子を見た白井が戦慄しながら言う。その言葉を聞いた峰岸が即座に意を唱える。

「大人の対応って、俺さっきぶっ飛ばされたんだけど。勢いで三回

回ったから。トリプルアクセルだよ。ダブルじゃないんだよ。大人の対応って大人と子供くらいの筋力差でぶん殴られる事なの？」

「あら、なんなら四回転でも五回転でも足腰立たなくなるまで殴ってあげましょうか。そうすれば暫くの間寝てられるわよ。専門支援科^{せんもんしえ}のベッドの上でね」

南野は顔中にサデイスティックな笑みを浮かべる。

「あ、なんか急に立ちたくなった！普通に立つだけじゃなくてなんか全身の体毛とかも立つちゃいましたー！」

予備動作もなく電光石火でその場に立ち上がる。

「あらそう、残念」

自らの申し出を断られた南野は心から残念そうな声だ。

「では南野さん俺達はこれで、任務の続きがあるので」

言った直後に白井の後ろ襟をひつつかみ、入学生達の列に逃げ込もうとした峰岸だったが、さらに自分の後ろ襟が南野に捕まる。思わず泣きそうになる。

「待ちなさい」

南野はシヨベルカーじみた力で峰岸を自分の所に引き寄せた。正確には引き摺り寄せたといっても過言ではない。

「峰岸はまたサボらないか私が見張っておくから。白井君は実井^{さねい}達の班と合流して。入学式が行われる予定の第三演習場にいる筈だから」

南野は一番近くに見えるドーム状の建物を顎でしゃくりながら言う。第三演習場は室内演習場とも呼ばれ、一応名前には演習場と付いているが、簡単にいってしまえば巨大な体育館だ。

「了解しました」

白井は敬礼を一度すると、そのまま第三演習場の方へと走り去っていった。

「俺って信用無いんですね」

走り去る白井を羨ましそうに見送りながら峰岸は言う。

「自分にそんなものがあると思っていたの？」

驚いた顔で南野が言う。

「……思ってませんけど。でもそんなに信用できないなら俺なんか鎮圧部隊に推薦しなくて良かったじゃないですか」

峰岸は不貞腐れたように言う。

「あなたの人間性はともかくとして、能力の方は信用してるわ。一年前の乱闘騒ぎからね。あの時、新入生とはいえ士官候補の戦略科三人を相手に、数秒で全員片付けたんだから」

自分の人生を狂わせた一年前の過ちを楽しい思い出でも語るかのように顔を綻ばす南野を見た峰岸は苦い顔になる。

「なんか今、物凄く複雑な気分なんですけど。本当に後悔してるんですよ。あれから数ヶ月の間は本当に大変だったんです。教官には呪文みたいに特殊戦技科へ転科するように勧められるし。周りは、なんか俺のことを腫れ物みたいに扱っし。教官の転科の話はどうでも良かったけど、初めての演習のグループ決めで一人余って教官に、

『なんだ、峰岸はあまりか。おい誰か、峰岸を入れてやる所は無いか？』なんて言われた時は、あのまま教室飛び出して寮で不貞寝しようかと思いましたよ」

その後、クラスに溶け込むのにかなり苦労したのだ。そのために一生分のエネルギーを使ったと峰岸は考えている。

何よりこんな危険で忙しく目茶苦茶な部隊に配属されてしまったんだから……とはいかに峰岸であろうと口には出せない。

「あらそう。意外に周りを気にするのね」

むしろその事が意外だという口調で南野が言った。

「それはそうと、どうするんです」

「どうするって？」

「あの生徒、内ポケットに拳銃持ってますよ。多分」

峰岸が指射す方向を南野が目で追っていくと眼のパツチリした、西洋的な顔立ちの少女に行き当たる。髪は黒いが、眼の色が日本人とは少し違う赤と茶色の中間ぐらいの色だ。肌は絹糸を編み合わせたようにきめ細かく白い。白いカンバスの上に一箇所、赤い絵の具を細い筆でスツと伸ばしたような唇は肌が白いだけに目立つ。総合的に、また客観的に見て美人ではある。

新入生達の列に紛れ込んでいるが明らかに様子が違う。初めての式典に浮き足立つ周りの新入生とは違い、落ち着いた様子で佇むその姿は、出来の良い美術品のようでもある。

「あら本当。左肩少し下がってるわね。重心も少し偏ってる。完全に丸腰ならああいう立ち方はしないわ。良く気付いたじゃない。可愛い子だから注意深く見てたの？」

峰岸は腹の立つニヤニヤ笑いをする南野を一瞬、本当に一瞬ぶん殴りたくなったが、自分の思考がいかに刹那的で向こう見ずでなものを自覚しすぐに思いとどまる。変わりに口調を憮然とさせる事で僅かに反抗の意を表すことにする。

「それで、どうします？^{ジョウギ}職質かけます？」

職質は警察などでよく使われる言葉だが、学内に限り、鎮圧部隊

にもその権限が認められている。

「そうね。警察に書類申請する前の帯銃帯刀は校則どころか思いっきり法律に触れてるわけだし、放っておくわけにも行かないわ。いきましよう」

二人は、なるべく相手を刺激しないようにゆっくりと少女の方へと歩いていった。

少女のに近付くたびに、彼女は本当に人間なのかと峰岸は不安になってくる。白い肌は近付くと本当に作り物めいている。その場に立ち尽くす姿は一時もぶれる事をしない僅かに上下する肩だけが、彼女が人間なのだという事を峰岸に知らせる。

自分達が近付く事に気付いたのか初めて少女が動きを見せた。といつても大きなアクションではなく、首から上をこちらに向けたただけだ。

「あの、ちょっと良いですか」

話しかけたのは南野だった。

「はい、なんですよ」

意外にも少女は関西訛りのある話し方だった。口調も人形のような外見とは裏腹にひょうきんそうだった。

「内ポケットに隠してるものを見せてもらいたいんだけど。良いか

しら？」

南野は相手を刺激しないよう。優しい口調で言う。

「ああ……」

少女は両手を打ち鳴らすと相好を崩した。

「あれですか？えーと、そうそう憲兵隊！違いますか？」

少女は大げさな身振り手振りで話す。言葉こそは関東圏のものだが、イントネーションが若干違う。

「憲兵隊……あなた関西戦技の人間？」

憲兵隊をキーにし南野は少女の身元をたずねる。

「あの、どういうことですか？」

いまいち事態を把握できていない峰岸は南野に詳しい説明を求める。

「関西戦技……関西地方の戦技校のことだけど、そこでは私達のような鎮圧部隊をさらに細分化して、学校の規律を正すことを専門に執り行う隊が存在するの。それが憲兵隊。私達を憲兵隊って言ったし、おまけに関西訛りもあるからそうじゃないかと思ったの」

「ああなるほど」

峰岸は南野を苦手としていたが、聞けば自分の知る限りの事は分かりやすく丁寧に説明してくれるというところは嫌いではなかった。「はい、確かに私は関西戦技から来ました。といっても正確にはもう関西戦技の生徒じゃないんです。」

訛りはあるが、明快で快活そうな口調だった。峰岸の第一印象とは大きくかけ離れた彼女の様子ではあるが、今はそんな事はどうでもいい。

「じゃあ、あんたは今完全な部外者ってことか。だったら余計に調べなきゃなんのだから……」

遠くを見るような目で、金魚の糞のように切れの悪い口調だった。戦技校では一般公開が行われる説明会や体育祭などの特殊な行事を除き、部外者が立ち入る事は堅く禁じられている。それはごく当然の事なのだが、戦技校ではそれが徹底している。というよりも、

徹底させられている。実際に軍や警察で働く予定の者達が、自分の拠点においそれと部外者の不正な侵入を許すのはまずい。

だからこそ、学生の内に警備の技術の習得実習という名目で、学生達（といっても能力の高い学生にだが）に学校への出入管理や巡回などの作業をさせている。当然そこで何らかの不手際があれば、山のような始末書を書かされる。

といっても学生に任せるのは危険度の少ないエリアの警備なので、仮に何者かの進入を許したとしても、一応どうにかなるようになっている。

だからこそ面倒くさい。目の前の少女が部外者ならば怠惰な警備を行っていた自分の方へもお咎めが来るのではないか。峰岸の頭の中には既に、山のような始末書に埋もれ、眼の下に隈を作った自分の姿が映像として思い描かれている。

「……嫌だ。勘弁してくれ……これ以上俺から時間を取り上げないでくれ。俺は昨日買ったゲームがやりたいんだ。ただでさえ少ない時間を上手くやりくりして、どうにかゲームをやる時間を捻出（ねんしゅつ）しているんだ。何故こんな事態に……俺が一体何をした。だれか、教えてくれ」

悪霊にでも取り付かれた様な口調でブツブツと何かを呟く峰岸に向かつて南野が静かに言った。

「もし、彼女が本物の部外者だった場合。あなたが何もしなかったのがこの事態を招いたと思うんだけど……」

半ば呆れた口調だった。それを聞いた峰岸は眼を見開き、全身を硬直させ絶叫した。

「なんやてえ!？」

何の為か口調はイントネーションの怪しい似非（えせ）関西弁だった。

「アンタ関西人の前で俄（いつわ）の関西弁使うの止めとき。なんか今めっちゃイラッときたわ」

件の少女は峰岸の似非関西弁に腹を立てている。形の良い眉は顔の中心線へと寄せられていおり、血色の良い唇は両端（くだん）が下がってい

る。よほど癪に障ったのか、口調も関東より関西の色が強くなっている。

「そんな事どうだって良いんだ。全く面倒な事になった……もし南野さんの言うようにお前が本物の部外者だったら俺はなあ……って、あれ？本物？って事は彼女は偽者……え？部外者の偽者なんだから本物って事に。いや、まて。あれ？本物の偽者？やべえ、頭痛くなってきた」

始末書の山と言う空前の自体にパニック寸前だった峰岸の頭は猛烈な空回りを続け、彼女が部外者ではないという結論に達するまでに十数秒を要した。

「あなた、私の言葉の細部を無意識に記憶してるくせに何でそんなにアレなのかしら」

南野が頂垂れながら言う。

「こいつ、アホや」

少女が理解しがたいものを見たかのように言う。

「アレで悪かったですね。アホで悪かったですね」

ようやく落ち着いた頭で半ばやけくそになりながら峰岸は言う。

それからごまかすように目の前の少女を指差す。

「それで、これは部外者じゃなければなんなんですか？」

「転校生よ。あなたがさっきブツブツ言っているうちに彼女から聞いたの。」

やんわり告げる南野。

「なんだ、転校生ですか。南野さん、知ってたなら早く教えてくださいよ」

「警備をサボった罰よ。実際に起したくなければ、これからはちゃんと働きなさい」

そんなやり取りをしていた峰岸に自分のことをこれ呼ばわりされた少女が食って掛かる。

「待たんかい！これってなんや、うちは器物とちゃうで。ちゃんと親からもろった立派な名前があんねん。ええか？一度しか言わんか

ら良く聞いとき」

少女は峰岸達に背を向けると、離れたベンチの背を向けたまま上り大げさに咳払いをした。それから少し間を開けると、くるりとターンし、峰岸の方をビシッと指差しながら言った。

「うちの名前は佐世保紗瀬穂さてほ させほや…… って聞かんかい！」

南野となにやら話し込み、彼女が何かを言っているのにも気が付いていない様子の峰岸に本場のツッコミを入れた。どうやらこの少女、普段は勤めて使わないようにしているが、興奮すると自分の地方の言葉が出てしまうようだ。

一方、何に憤ってるのかわからないという風に振り返った峰岸は、たった今、南野から聞いた情報を踏まえ彼女に話しかける。

「ええと名前は、佐世保紗瀬穂さんか。なんか舌噛みそうな名前だな。自分の名前十回続けて言えるか？」

佐世保が部外者ではない事が分かり口調だけは若干丁寧なものになっていた。

「ホンマ、腹の立つやつだな。自分の名前くらい言えるわ。十回でも二十回でも言ったろうやないか。よく聞いとき！佐世保紗瀬穂佐世保紗瀬穂佐世保紗瀬穂佐世保しゃしえほ」

「……」

「……」

峰岸と佐世保。向かい合う二人に気まずい沈黙が流れる。南野は、笑を必死に堪えて下を向いてしまっている。

「あ、あかん。今日はうち舌の調子が悪いねん」

歯切れの悪い良いわけをする佐世保はポケットから喉飴を出し舐め始めた。

「舌の調子が喉飴で治るのか？」

別に聞いたつもりはなかったのだが、何気ない峰岸の呟きは佐世保に聞こえていたらしい。

「違うねん。これはあれや……ただ舐めたかっただけや。嘘やないで」

必死に弁解するが、その必死さが胡散臭さを倍増させていることに佐世保は気付いていない。

「まあ、気にするな。四回までは嘔まずに言えたんだ。日常生活に支障は無い」

氣遣うように峰岸は言う。

「ホンマに？本当にそう思いますか？」

標準語と関西弁の混ざった口調で佐世保は言う

「ああ、俺が保障する」

峰岸が力強く頷く。

「なんかやつすい保障やなあ。まあええわ。おまえ、アホやけど悪い奴じゃないみたいやな。飴ちゃんやるさかい手え出し」

言いながらゴソゴソと自分のポケットをゴソゴソ探り出す佐世保。
「お、おま……まあ良いや」

自分の氣遣いに思わぬ駄目出しを受けた峰岸は何かを言いそうになったが、直ぐに思い直し。代わりにこう切り出した。

「ところで、お前……佐世保さんは何でここに居るわけ？」

「ああ、それやねんけどな。まあ、よくある話や。寮に入った直後、転校生の実力検査がある言われて担当教官のどこに行くつもりやったんや。せやけど、この学校アホみたいに広いわ。検査会場へ向かうはずが自分が何処にいるのかすら分からなくなってしまった。それで途方に暮れとったらあんたらに話しかけられたってわけや」

「要するに迷ったのね。佐世保さん」

長々とした佐世保の話の話を迷ったという三文字に凝縮させたのは南野だ。

「味も素っ気もない言い方をするとそういうことや。……あとうちを呼ぶときは紗瀬穂でええわ。うち他人行儀なのは嫌いやねん。だから下の名前で頼むわ。呼び捨てに抵抗のある初心なハートの持ち主やったら紗瀬穂さん。あと紗瀬穂ちゃんとか紗瀬穂たんなんてのもありや」

本人は親しみやすいキャラを演出するためなのか言い終わると

小さくウインクした。

峰岸にしてみても（うわ、実際にウインクするやつって初めて見た）などと考えている事は口には出さない。実際整った顔の持ち主なので問題ないといえばそうなのだが、これは漫画やアニメではない……峰岸が軽く引いているのも仕方ない事だ。ウインク云々に対する印象は自分の胸にしまいこみ、代わりに峰岸は彼女に言う。

「ちゃん付けはともかくたん付けは初心なハートの持ち主には絶対無理だ。まあ、呼び捨てでいいって言うなら今後はそうするとしてこれからどうするつもりだったんだ？なんならその担当教官の所まで送ってや……」

その台詞が最後まで言われる前に、佐世保の声が被せられる。

「ホンマに？待ったで、その言葉」

佐世保は胸の前で両手を組み、赤茶色の瞳をきらきらさせながら、図々しい己の心情を吐露する。

「待ってたのかよ」

苦笑いのまま言う峰岸。

「心待ちにしとったでえー！」

「わあったよ。南野さん、そういうことなんでちよっくら行つてきます」

やけに行動的な峰岸を南野は胡散臭そうな眼で見つめる。

「峰岸君。あなた、随分彼女に親切ね。もしかして彼女を送ったらどこかに消えようとしてない？仕事ほったらかして……」

凶星だった。南野の言葉に視線を泳がせる峰岸。

「まさか、そんな事あるわけ無いじゃないですか」

大根役者の演技中のような口調＋早口。峰岸には嘘をつく素質が欠落している。そんな様子を見た南野が溜息を吐く。

「大方そんな事だろうと思っていたわ。いいわ行つて来なさい」

「え！？いいんですか？イヤッホー！」

一瞬にして有頂天になる峰岸に南野が釘を射す。

「勘違いしないでね。彼女を送ったらちゃんと帰ってきなさい。帰

ってこなかったら……分かってるわね」

南野の言葉の最後の一文は一切の感情が消え失せたような声だった。

その時の峰岸は、超高速で膨れ上がった風船が、また超高速で萎んでゆくような様子だった。

そんな峰岸の見て、佐世保がボソつと呟く。

「こいつ本物のアホや」

二人には聞こえないような声だった。

数分後、テンションが著しく低下した峰岸とコイツに付いて行つて本当に平気なのだろうかという表情の佐世保は、入学式会場を後にした。

起（後書き）

関西人の少女が出て来ます。ですが私は関東の人間です。作中の佐世保さんは似非関西弁を話しているのですがそれに対して気を悪くした方が居たらこの場を借りて謝罪いたします。

また表現が間違っている。誤字や脱字などありましたら知らせていただけると幸いです。まだ1話目ですが感想等ございましたらよろしくお願いします。

模擬戦（前書き）

今回、短いですが戦闘シーンを書いてみました。難しいというのが書いてみた感想です。

あとは、自分の書いた未熟な文章が皆さんに伝わる事を祈るのみです。

それではどうぞ。

模擬戦

戦技高校の敷地面積は広大である。その広さは敷地の端から端まで移動するのに車が必要なほどで、東京ドームが何個入るかでは物差しの単位が小さすぎると言われるほどだ。十センチ定規で十メートルを測るようなものである。

これだけの敷地をどうやって用意したのか。もしも二世紀前の人間が現在にタイムスリップしてきたら、悪どい地上げを行い数百万の市民の涙と引き換えたと考える人も居るのではないか。

しかし実際はそうではない。現在、戦技高校が建てられている敷地の殆どは元は無人の地域だったのだ。日本というごく小規模な国に無人の敷地があったのはある大きな天災が原因だった。

「なあ、今から二七〇年以上前は人口が1億5千万人も居たって話信じられる？」

第三演習場、つまり新入生の入学式会場から一キロほど離れた二車線道路を二つの人影が歩いている。その内の片方、佐世保紗瀬穂が関西訛りの混ざった口調でそう切り出した。

「あ？ああ……そう言えば歴史の授業でそんなこと言ってたっけ……なんでもこの辺りは人口密集地だったとか」

少し前を口が半開きのだらしない表情で歩いていた峰岸は佐世保の問いかけに関する記憶をどうにか引つ張り出す。

「信じられんな。今の日本の総人口はどのくらいだったか……」

どうしても答えが出てこないのか峰岸は足を止め、難しい顔で上を向き考え込んでしまった。

「約七千万や。それぐらいちゃんと覚えとき。常識や。二〇六七年に起きた『六月の天災』から少しずつ増えて現在はやっと七千万や」

歴史の授業で聞いた情報をそのままアウトプットしているからなのか、佐世保の口調は一本調子だった。既に二人は歩き出している。「そうか、まだ七千万なのか。戦争ばかりだと人口も増えにくいよ

な」

どうでも良さそうな口調だった。歩きながら鼻くそをほじっているのが本当にどうでもいいのだろう。

「そうや。『六月の天災』以来、どうにかバランスを取っていた世界のパワーバランスが崩れたがをきっかけで日本も何度か侵略されそうになったわけやし」

幸い峰岸が鼻くそをほじっている姿を見ずに済んだ佐世保は苦い顔をしながら話す。

「日本は世界有数の『ミリオンライト』の産出国だからな。狙われるのは当然だ……」

そう言つと峰岸は制服のポケットから両手のひらで包み込めるくらいの緑色をした石を取り出した。

「こんなもんから、生物の進化を促す、未知のエネルギー波が出てるとはな……身体能力の著しい向上。その身体能力に耐えうるだけの肉体の強化。進化つつうより変異だろ」

言い終わると峰岸は『ミリオンライト』をまたポケットにしまいこむ。

「それだけやない。その石は生物の進化を促すだけやないアンタの持つてる大きさの石で日本の一年分のエネルギーが賄える超高エネルギー物質や。隕石の落ちなかった国は、喉から手が出るほど欲しいはずや」

そう、隕石雨の落下。『六月の天災』とはそういうことだ。小規模な隕石が大量に世界の広い範囲に落ちたのだ。何の因果かその隕石雨がとてつもなく有用な高エネルギー物質だということがとある研究所により証明されてしまい、各国は天災の被害から立ち直ると（世界地図から消えた国や名前が変わった国も多数存在する）各地に散らばった『ミリオンライト』の回収作業が始まった。そこには領土や領海などといった言葉は小うるさい蠅のように扱われ、各国の諜報機関が『ミリオンライト』という新しい力を手に入れようと躍起になっていた。

そんな事が起これば当然国際情勢は急激に悪化する。第三次世界大戦が勃発。そんな中で当時、日本という小国が独立を守りえたのは、隕石雨が大量に降り注いだ末に世界有数の『ミリオンライト』産出国となったことにより、身体能力のや生命力の急激な増加に加え一部兵器の動力部に『ミリオンライト』が使われていたからに他ならない。

「百万の使い道のある鉱石ミリオンライト。天災がもたらした破壊と繁栄。世界中の人口を三分の一まで激減させた『六月の天災』がまさか新たな繁栄をもたらした。……なんか皮肉じゃね？」

「仕方ないやん。今更『ミリオンライト』無しで生活しろっちゅう方が無理なんや。だから守らなあかん。日本という国も日本の生命線『ミリオンライト』もな」

佐世保はなんらかの覚悟めいたものを表情に滲ませている。

「まあ、俺達が教わってるのは守り方じゃなくて殺し方だけだな」

尻を掻きながら峰岸は言う。声は春の陽気に当てられて眠そうだ。

「身も蓋も無い言い方やな」

佐世保は苦笑いしながらも少し寂しげな表情だ。

「なあ、人間はいつになったら戦争を止めるれるんかな」

ポツリとそんなことを漏らした。峰岸は予想していなかった佐世保のその言葉に歩みを少し遅らせる。考えるように黙り込み、暫くすると口を開く。

「人間が今より賢くなるか、馬鹿になるかのどっちかすれば戦争がなくなる可能性はあるな」

「どういうこと？」

佐世保は峰岸の言葉の意図がつかめず怪訝そうな顔になる。

「人間が今より何倍かは分からない十倍いや百倍なのかもしれないかもつとかかもしれない。とにかく今よりもつと賢くなつて戦争なんてアホらしいと思うような新たな思想を持つか、獣レベルまで脳みそが退化すれば、余計な事も考えないだろ」

話しながら峰岸は自分の顔が熱くなるのを感じていた。話し始め

て四文字で後悔していたのだ。自分の柄じゃないと。

自分の考えをそのまま相手にぶつけるのもそうだが今言ったことを思い返すとしてもなく恥ずかしい。流行らない詩人のような言葉だ。いや、それ以前かもしれない。とにかくどこまでも捻くれた回答だ。マイナスにマイナスをかけても普通はマイナスにしかない、などのたまう中学生のようだ。正直穴があつたら入りたいくらいだが、残念ながらそんな穴は何処にも存在しない。苦し紛れに「今日は暑い」とわざとらしい口調で言つと手団扇で顔を仰ぐ。

恥ずかしさのあまり、佐世保には目を合わせずに終始空を見て話していたので、彼女が呆氣にとられたような表情をした後にその口元が小さく笑つた事には氣が付かなかった。

「そうかぁ。ならうちの生きてる内は無理かも知れんな」

呟いた佐世保の言葉は峰岸の耳には入っていない。佐世保の少し前を早足で歩いている。

「ちよつと速いわ。なにシャカリキになって歩いとんねん」

佐世保は峰岸に小走りで近付いて行く。

それから少しの間、道なりに歩くと二メートルほどの高さの黒い塀に突き当たった。二人が建っている位置から右へ少しずれたところに同色の鉄製ドアがある。その頃には峰岸の心理状態も正常な物に戻っていたので、佐世保にも普通に話しかけることができた。

「着いたぞ。転入生実力検査会場。正式名称は第二演習場だ。ここは遮蔽物の無い場所を想定して作られた演習施設だ。こんな施設だから試験内容は簡単な模擬戦だと思うぞ。じゃあ俺はもう入学式会場に戻るから。まあ頑張れよ」

「おおきに。案内助かったわ。ええと……そういえばうちまだアンタの名前聞いてなかったわ」

佐世保の言葉で自分の名前を告げていなかった事を思い出す。

「そういえば言ってなかったな……峰岸だ。峰岸竜介」

「峰岸竜介……なんかカツコええやん。どう呼んだらええの？」

「別に呼びたいように呼んで構わないぞ」

峰岸は思った事をそのまま口に出す。

「じゃあ、ドラちゃんて決まりや。竜介の竜からとったんや。ナイスネーミングだと思わへん？」

ドラちゃんは予想外だった。一度好きに呼んでくれて構わないとだったので文句を言うこともできない。呼び名などどうでもいいと思っていたが、いくらなんでもその呼び名はどうだろう。これから顔をあわせる度に目の前の少女にドラちゃんと呼ばれ続けるスクールライフを想像し、暗澹^{あんたん}たる気分になりそうになった時、そんな峰岸の様子を見ていた佐世保は堪えきれないというように噴出した。

「冗談や……ブクク……自分今凄い顔しとったで。カメラ持ってなかったのが残念や」

峰岸は正体不明の敗北感を感じていたがそれを認めたくない自分もいる。せめてもの抵抗に佐世保をジト目で見据える。当の佐世保はそんな視線を意にも反さずニヤニヤとした笑を零す。最早勝ち目なし。小さく溜息を吐くと自分で一番マシだと思う呼び名をチョイスした。

「苗字か名前で頼む、呼び捨てかそうじゃないかはそっちの好きにしている……」

「そうか。じゃあ下の名前で竜介でええか」

「ああ、それなら問題ない。なんか変な事に時間使っちゃったなそ

れじゃあ俺はそろそろ……」

帰ろうと言いつけかけたところで演習場の出入り口である鉄製のドアが音もなくひとりでに開いた。

中から出てきたのは峰岸もよく知る男性教官だ。筋肉質の大柄な体軀は見るものを圧倒する。厳つい顔はそんな印象に拍車をかける。峰岸が初めて彼を見た際、顔でボディビルが出来そうだななどと思つたほどだ。峰岸の姿を確認した教官が野太い声で峰岸に呼びかける。

「あら？みねちゃんじゃない。どうしたの？今日は入学式の警備だつて聞いてたわよ」

野太い声でお姉言葉を発した人物は峰岸を見ると顔中を綻ばせる。言葉使いだけでなく仕草も乙女っぽい。女性ではなく乙女だ。

「どうも、石渡先生。今日はこの子をここに送り届けただけです。転校時の実力検査を受ける事になっている佐世保紗瀬穂さんです」

石渡の風変わりな離し方を聞いて啞然としていた佐世保は峰岸の言葉で我に返る。何の心構えもなしに自分の名前が会話に出てきたので若干おどしなから前に出る佐世保。

「あの、関西戦技から転校してきました。佐世保です。よろしくお願ひします」

訛りのある標準語でなんとかそれだけ言つと頭を下げる

「あら、可愛い子。あたしと張るかしら？あら、ごめんなさい。自己紹介が済んでなかったわね。私はこの学校で教官をしている石渡佐和子よ。よろしくね、さっちゃん」

気さくな口調で言う石渡。会つていきなりあだ名を付けられたことよりも気になることが佐世保にはあった。

「佐和子？」

佐世保は外見と名前の絶望的なアンマッチに軽く驚きを見せている。

「本名は義男だ。佐和子は自称だ。安心しろ」

啞然とする佐世保に峰岸が耳打ちをする。

「それじゃあ、僕はもう部隊の方に戻りますんで……」

何か言いたそうにこちらを見ている佐世保に背を向け、来た道に戻ろうと一歩足を踏み出す。

「丁度よかった。鎮圧部隊の今の隊長さんってなんちゃん（南野）でしょ？私の方から話しておくからみねちゃんに少しお手伝いを頼みたいの」

峰岸は二歩目を踏み出しそうになった所で足を止める。回れ右をするとなにやらくねくねと身を擦じらせている石渡が視界に入る。

「なんですか？手伝いつて……」

げんなりしながら内容を確認する。

「ま簡単な話よ。あたしの変わりにこの子との模擬戦をお願いしたいの」

「……自分でやればいい事では？」

当然そういう結論に至るのだが、峰岸にだって何か理由がある事ぐらいは予想が出来た。これは峰岸なりの会話の仕方だ。

「あたしもそのつもりだったんだけどねえ。実その子より先に、もう一人転校生が実力検査を受けたの。その時の試験官は当然あたしだったんだけど、模擬戦で怪我しちゃったのよう。動けないって事はないんだけどお、歩くのが精一杯よ。走ったり飛んだりは無理。模擬戦なんて当然無理」

照れ隠しのつもりなのか、石渡は見る者に生理的嫌悪感を与えるはにかみ笑いを浮かべている。しかし、いつもなら一歩くらい後ずさつても良さそうなその笑いも、たつた今、石渡の口からでた発言内容の衝撃の方が大きかったおかげで、峰岸はその場に留まる事が出来た。

「先生が模擬戦で怪我ですか？」

峰岸の発言が驚きの理由を物語っている。

今はこのようなふざけた口調の石渡も元は軍の特殊部隊の隊長を務めていた。怪我で引退したのだが、それでも戦場で養われた戦闘技術には目を見張るものがある。特にナイフや素手での近接戦闘に

おいては学内の教官全てを含めても右に出るもの無しと言わしめる程の実力者である。

その石渡に未だ戦場を知らない高校生が怪我を負わせたというのが信じられない。

「そうよ。強かったわ、本当に。あたしも自分が最強だなんて思っ
てないけど、それでも学生に遅れをとるんって思わなかったわ。い
るのねえ……天才って」

嬉しそうに語るその顔には、負けた悔しさや天武の才に対する妬
みは無かった。若い世代から有能な人材が輩出されるのが単純に嬉
しいのだろう。こんなに人がいいのでは、軍の特殊部隊など水が合
わなかったに違いない。

「それで俺に対戦相手を……というわけですか。まあ、俺は別に構
いませんよ。……彼女が了解すればの話ですけど」

峰岸はどうしたものと佐世保の方を見る。

「別に構わんで、誰とやろうが」

あっさりと好戦的な事を言う佐世保は別段気負った気配も無い。

「決まりね。二人とも更衣室で戦闘服に着替えてきたらもう一度こ
こに集合してちょうだい。みねちゃんもさっちゃんを更衣室まで案
内してあげてね」

石渡の言葉で一時解散となる。

佐世保を女子更衣室前まで送りドスの利いた声で「覗いたら殺す」
とお約束の釘を刺された峰岸は、その声を盛大に無視し男子更衣室
に向かう。別段クールな俺、を気取るつもりは無かったがあとあと
思い出してみると幾分それに該当する行動があったかもしない
反省しつつ、その道すがらで南野に電話をかける。石渡が話を通す
とは言っていたが、一応自分でも報告を考えたのだ。

数回のコール音の後聞き慣れた声が受話器の向こうから聞こえた。
峰岸にとっては聞き慣れたくもない声だ。

「南野さん、お疲れ様です」

とりあえず挨拶から入る。

「峰岸君、模擬戦やるんだって？」

既に石渡經由で情報が行っていたらしい南野が模擬戦の話を持ち出す。峰岸にとっては説明する手間が省けてありがたい。

「ええ、なんか成り行きで」

「まあ、頑張りなさいな。こっちは気にしないでいいから」

その言葉で少し峰岸の肩が軽くなる。実は教官の頼まれごとはいえ、仕事をほったらかしたことは少しまずかったのではないかと思っていたのだ。このあたりの融通利くのは素直に隊員としてはありがたい。素直に感動できる。切符のいい姉御肌などと口に出せばまた殴られるだろうが、峰岸にとっては産児の言葉であり、何処までも着いていきます姉御などと考えていることを悟られたのだろうか。南野の声が急に鋭くなる。

「その代わり、鎮圧部隊として恥ずかしくない戦いをしなさい。後で石渡先生から模擬戦の結果聞くから。ちゃんとやっていないようだったら首に縄引つ掛けて機甲科きこうかの戦車に括りつけてから学内引きずりまわすから」

色々と台無しになった。恐らく冗談ではない。峰岸は自身の顔が引き吊るのを感じた。

「そうならないように努力します。全力で」

「私もそうならない事を祈ってるわ」

とても祈っている口調ではなかった。さっきの感動を返せとやはり脳内で講義をする。無論彼女に届くはずも無いのだが。

それからも少なくとも峰岸にとっては不穏なやり取りが続き、電話を切る頃には軽く憔悴していた。

どこかで大事な選択を間違えたかも知れない。考えても詮無いことを考えている紋々と考える峰岸は男子更衣室と書かれた札の掛かった部屋に着くとゆっくりと扉を開いた。

扉を開けた途端汗とカビの混ざったような臭いがしたが、かぎなれた臭いなので別段気にする事も無くズラズカと部屋の中へと入ってゆく。

適当な場所まで来ると、峰岸は自分の袖を腕時計を確認するような動作で捲る。腕には腕時計型の機械が巻かれていたが腕時計ではない。

現在世界中に普及している小型の物質転送端末だ。無機物に限られるが、転送器というボックス状の機械の中に入れた物質を距離に関係なく自分のもとに転送することが出来る。

戦技校の生徒は皆この端末の携帯を義務付けられている。自分の武器や戦闘服の補完されている転送器のアドレス呼び出すと、戦闘服とあらかじめゴム弾の装填された訓練用の突撃銃をその場に呼び出す。手の上に突撃銃がさらに足元には戦闘服が転送音と共に現れる。

服というより鎧に近い戦闘服を慣れた手つきで身に着けていく。まず、鎖帷子を薄くしたような素材のアンダーアーマーに袖を通す。軽くて薄手だが、防刃性に優れた特殊素材で編まれている。さらにその上にはゴツゴツとした黒い鎧のようなオーバーアーマーを身に着けてゆく。着るというより装着して行くという方表現が正しいオーバーアーマーはゴツゴツとした外見とは裏腹に弾力性と衝撃の吸収力に富んでいて、銃弾の衝撃を殺す効果が高い。それでも万能ではない為、被弾すればそれなりの痛みを伴う。

見た目に重そうな戦闘服だが上下の総重量は約三キロという軽量なもので動きを極端に制限するものではない。戦闘服に身を包んだ峰岸はまだ床に置いていた訓練用の突撃銃を抱えると更衣室を出て行った。

演習場には峰岸が一番乗りだった。遅れてきた佐世保と適当な話題で会話を繋いでいると石渡が到着すると早速模擬戦が始まる事になった。

現在、峰岸と佐世保は五十メートルほど離れ、向かい合わた状態で立っている。そこから更に離れた場所、演習所運の殆ど壁際には四方を防弾ガラスに囲まれた教官室が建っている。その中に演習場内の放送用スピーカーに通じるマイクを持った石渡がいる。

教官室のマイクを通じ石渡が二人に話しかける。

「それじゃあ、模擬戦のルールを説明するわね。今回は単純な戦闘能力を見るためのものだからトラップの使用は禁止。勝敗条件はどちらかの戦闘不能。降参も認めます。あくまでも模擬戦なんだから殺傷能力の低い訓練用武器を使用する事。分かった？」

あらかたルール説明を終えた石渡はそうように締めくくった。

「了解」

「オーケーや」

二人はそれぞれの言葉で了承の意を示す。

「それでは両者構えて……」

峰岸と佐世保はそれぞれの構えを取る。峰岸は突撃銃を構え前屈みに腰を落とす。対する佐世保は攻撃力、命中精度の面では突撃銃より劣るが、軽くて取り回しやすい短機関銃を両手で持ち、峰岸より遥かに低い姿勢の構えをとった。

両者が構えた事を確認した石渡は普段の野太い腹のそこから出すような声で一言。

「始めえ！」

始めに動いたのは峰岸だった。持っていたフルオートにした突撃銃を腰だめで横に薙ぎ払うように水平射撃。左から右へと一直線に弾がばら撒かれる。

自分に向かい迫る銃弾を見た佐世保が動いた。低い大勢から思い切り体を蹴り出す。佐世保の体が砲弾のように前へと飛び出す。銃弾と地面の間、一メートル弱の空間に頭を限界まで低くしながら突進して行く。真横にばら撒かれた銃弾は彼女の頭上を通過し、二人の距離は一気に縮まる。

しかし峰岸とて渋々ではあるが鎮圧部隊を構成する部隊員だ。最初に彼女の構えを見たときにこの展開を読んでいた。滑走する佐世保の頭上を自分の放った弾丸が通過するかしないかのタイミングで足元を狙った水平射撃を行う。

しかし当たらない。限界まで体を縮めた反動で今度は天高く飛び上がり、地面スレスレを走る弾丸を避ける。峰岸の放った弾は地面に命中。砂埃を上げる。この動きこそ『ミリオンライト』により、身体機能を強化された人間の成せる業だ。

動体視力の強化、肉体の強化、骨格や内蔵機能の強化。全てが揃って初めてできる動きだった。『ミリオンライト』落下前の人間に銃弾を目で見て避けるのは不可能だ。各国が『ミリオンライト』を大量に欲しがる理由の一つがこれだった。

峰岸の射撃方法が大雑把な狙いの水平射撃なのは、一箇所に弾を集中させては当たらないというのが大きい。間隔的には槍をゆつくりと突き出されているに近い。点の攻撃の利点は線の攻撃よりも視認しにくいことだ。同じスピードで繰出される攻撃なら、斬撃より突撃の方が見えにくいのだ。

しかし、その攻撃がしつかり見えていたならどうだろうか。当然斬撃より容易に避けられる。利点を奪われた点の攻撃など最早役には立たない。だからこそ一箇所狙う集弾射撃より。広範囲を薙ぎ払うように弾をばら撒く水平射撃を行った。

しかし、それでも当たらない。当然だろう。彼女には弾が見えて
いる。だからこそ峰岸は彼女を空中へと誘導した。

「王手だ！」

この時峰岸は初めて口を開いた。どんなに高い身体能力を備えて
いようが、どんなにはつきり銃弾が見えようが、空中では避けよう
が無い。

佐世保の落下に合わせて峰岸は銃を構える。しかしこの時、いつ
の間にか彼女の手握られている武器が入れ替わっている見た峰岸
は内心舌打ちをする。飛び上がる瞬間、物質転送端末を使い瞬時に
武器を入れ替えたのだらう。

問題は彼女の手握られている武器だ。空中で撃つには不釣合
いな長い銃身にはそれを証明するかのように、地面に設置して使うこ
とを想定されたスタンドが付いている。

そう彼女の手に握られているのは遠距離からの機甲兵器の破壊を
目的とする対機甲ライフルだった。

峰岸が発砲する直前、佐世保は持っていた巨大なライフルを峰岸
の射線と垂直になる方向に構えた。その時に彼女がその銃で何をす
るのかは峰岸にも分かった。

（完全に詰んだと思ったんだがな）

ダメ元で銃の引き金を引く。銃弾は落下する彼女に当たるように
射出された。

同じタイミングで対機甲ライフルを発砲した佐世保の体は強大な
反動で落下軌道が僅かに、しかしその誤差を無視できないくらいに
はずれた。峰岸の銃弾はまたも空を切る。今回外した銃弾は当てる
つもりで撃ったものだった。策が潰された峰岸は転送器を操作し突
撃銃を元の場所へと転送する。一連の攻防で、距離が潰されると銃
の有用性は半減する。そういった判断に基づいた行動だ。

「当たらんかったな」

佐世保も既に巨大なライフルから小刀（刃引きされた物）へと持
ち替えている。峰岸は彼女も同じ判断をした事を読み取り、自分か

らも間合いを詰める。

風を切る音と共に、佐世保の姿が視野の大半を占めるようになる。間合いに入るや否や峰岸の左鎖骨目掛けて小刀が振り下ろされる。

振り下ろされた小刀を峰岸はバックステップで避けたが、避けたはずの小刀からバットを振り回すかの如く凶悪な音が鳴る。バックステップ一回、その動作だけで二人の間に十メートル近い間合いが開いた。

開いた間合いを埋めるように今度は佐世保が間合いを詰める。力強く地面を蹴るように一直線に峰岸へと向かって行き小刀を横向きに振るう。刃引きされていなければ体の前側が一直線に切り裂かれるような一撃が峰岸に襲い掛かる。

峰岸は迫る刃を上体をそらす事で空振りさせる。空振り後の僅かな隙を突こうと佐世保に？みかかろうとするが、小刀を振りきった事で身を捻った反動を使った左拳が顔面に飛んで来来る事に気が付く。

佐世保に？みかかろうと重心を前に傾けていた峰岸はその左拳を交わす事は不可能と判断した。彼女をつかむ為に伸ばしかけていた右腕で左拳を跳ね上げ軌道を逸らす。そのまま手首を？み、軽く斜め前方に引き出すと佐世保の体制が崩れた。体を沈めながら相手に背を向けるように一八〇度回転する。腕を跳ね上げた事により空いた佐世保の左脇を空いている方の腕で挟み込むと沈めていた体を一気に伸ばし彼女を背に担ぐ。

「うおりゃ！」

掛け声と共に背に担がれた佐世保の体が宙を舞う。そのまま一回転した佐世保が地面に叩きつけられる。

「……！！」

柔らかい土の上とはいえ、切れのいいの背負い投げを食らった佐世保の呼吸が止まり苦しそうな顔になる。すかさず佐世保の鼻先に触れるか触れないかの寸止めで峰岸の下段突きが振り下ろされた。拳は当然ずとも峰岸の拳から発せられた拳圧を顔に受けた佐世保はそ

の一撃が自分の顔面を陥没させる程の威力だった事を悟った、一瞬悔しそうな顔をしたがすぐに観念したように目を閉じる。

「参った」

佐世保はたった一言、それだけ言った。

「それまで！」

佐世保が発したこの一言により石渡が模擬戦の終了を告げる。

石渡が教官室から峰岸の所に来るまで、佐世保は峰岸に投げられた時のまま体勢で地面に寝そべっていた。

「立てるか？」

峰岸は倒れたままの佐世保が心配になり、手を差し出しながら言う。

佐世保はその手を振り払うような事はせず、差し出された手を握り返すと黙って峰岸に引き起こされる。

「あかん、まだ頭クラクラするわ」

投げられた衝撃で脳が軽く揺さぶられ、軽い脳震盪を起しているようだ。佐世保は虚ろな表情だった。

「ああ、その……すまん」

流石に少しやりすぎたと反省する。目の前の少女は思ったより強かった。その為か手加減等と悠長な事を考える余裕は無く、後半はかなりムキになっていたといえる。

「かまへん、かまへん。模擬戦なんや。こんなんで謝られたらうちの方が申し訳ないわ。それにしても竜介、あんたホンマに強かったんやな。驚いたわ」

未だダメージの抜け切らない佐世保だが、そんな状態でも峰岸が強いという事実には驚いたらしい。何らかのカルチャーショックを受けたような表情だ。

「曲がりなりにも鎮圧部隊員だからな。お前こそかなりやるようだ……関西にいた頃はどこの部隊に所属してたのか？」

「一応警備隊に所属しとったわ」

中央戦技にはそういった部隊は存在しない。南野の話によると関

西戦技では中央戦技よりも部隊が細分化されているらしい。警備隊というからには、自分達と似たような役職なのだろうと峰岸にもおおよその予想はついた。

「二人ともお疲れ様」

唐突に会話に入ってきたのはもちろん石渡だ。彼の離し方は模擬戦を終えた時点で元に戻っていた。

「みねちゃんは相変わらず強いわね」

峰岸の方を見ながら石渡は言う。

「まあ、色々必死でしたから」

欠伸をしながら適当な返事の峰岸。

「そのみねちゃんと、あそこまでやり合えるさっちゃんも凄いじゃない」

今度は佐世保の方を見ながら言う。彼の中では佐世保のことは既にさっちゃんとしてインプットされているらしい。

「おおき……ありがとうございます」

少々変わってはいるが、自分好みのフレンドリーな石渡の態度により、佐世保は危うくいつも通りの調子で話しそうになる。

「今年の二年は豊作ね。あたし嬉しくなっちゃう」

厚さのある自分の胸に両手をあて、うつとりとした表情の石渡はなにやら愉快的な想像でもしているに違いない。

「で？石渡先生。俺達はもう戻っていいんですか？」

妄想中の石渡に峰岸が話しかける。いい加減慣れては来たが、やはりこの教官と話すのは疲れる。峰岸は一つ大きく息を吐く。

「あらごめんなさい。もういいわよ解散。みねちゃん、どうもありがとだね。さっちゃんもお疲れ様。明日から授業がんばってね」

小さく手を振る石渡に峰岸は小さく頭を下げ、佐世保は愛想良く手を振り返すと二人は模擬戦を行った訓練場を後にした。

模擬戦（後書き）

ノープラン小説2話目です。サブタイを見てもお分かりでしょうが、当初は起承転結の4話構成にしようと考えていました。

でも無理です。一話目を投稿した時点で悟りました。というわけで今回からちゃんとタイトルをつけます。

この小説に関するご指摘ありましたらよろしくお願いします。

人生にセーフ機能はありません（前書き）

ノープラン小説三作目です。何処となく中二臭い世界観となり始めました本作も無事三話目の投稿が完了しました。
生暖かい目で見守ってやって下さい。

人生にセーブ機能はありません

広大な敷地に並び立つ各科の学科塔は用途や特色に合わせた形や大きさをしている。例えば陸の戦場での主戦力となる通常の戦闘用歩兵を養成する総合戦技科はあらゆる科の中で最も人数が多いため学科塔も自然と大きな建て物となる。生徒総数が約二千人の中央戦技高校。実にその四割がこの学科に在籍するのだから無理もない。

総合戦技科に次いで学科塔の規模が大きいのが戦車や戦闘機の操縦からその他諸々の精密機器の使用法を学ぶ機甲科だ。これは生徒数が多いというよりも、戦車や戦闘機などの保管用のドッグを作ると自然と大きくなってしまふ。弾薬の保管庫もあり、それらもかなり大型なので場所をとってしまうのだ。

そんな機甲科と総合戦技科に挟まれるように隣接するのが整備兵や医療兵などの専門知識を必要とする兵科を養成する専門支援科だ。ここの科の生徒には前線に出ても邪魔にならない程度の基本的な戦闘訓練意外は全て自分達の専門分野の勉強に時間をつかう。戦技校の中では比較的戦闘の不得意な者の多い学科だ。

地雷の撤去や障害物の除去、拠点の構築等を執り行う工兵や戦闘用歩兵に追従し負傷者の応急処置を施す衛生兵を養成する総合支援科せんけいしゅうえの学科等も先の三つの学科塔と近い位置に存在する。これは前線で敵との戦闘の最中に作業をしなければならぬ事も想定される為、総合戦技科との合同訓練が多いためである。医療兵と衛生兵。似たような役回りの兵科だが違いを説明するのは簡単だ。後方で治療するか前線で治療するかだ。

これらの学科塔は比較的によく交流も多いが、あまり他科との交流のない学科として作戦立案及び作戦支持を行う人材を要請する戦略家と、少人数での作戦行動を中心に行う人員を養成する特殊戦技科が上げられる。戦技校でも人数の極端に少ない科だ。両科共に知力戦闘力共に優れ能力の高い学科だ。そういったこともあり、特に

戦略科の人間に見られる傾向だが他科に対して横柄な振る舞いの多い学科といえよう。特殊戦技科にも有能な人材が多々居るのだが、基本的に無害だ。その無害さは排他的かつ閉鎖的な学科故、他科の前には滅多に姿を現さないというネガティブな理由からきている。

総合戦技科に在籍する峰岸も、入学当初に起した乱闘騒ぎにより教官達に特殊戦技科への転科を繰り返して進められた。

そんな薄気味悪い学科に転科なんぞ死んでもごめんだと峰岸はその度に断り続けた。ようやく声が掛からなくなったのはそれから数ヶ月後のことだ。

始めこそ色々大変な思いをした中央戦技での学校生活もようやく落ち着き、本日で丁度二年目に差し掛かる。先日参加した入学式の警備も佐世保との模擬戦ということ以外はさしたるイベントも起きず終了となった。

新年度の始業式を終えるた生徒達はそれぞれ自分のクラスへと戻って行く。戦技高校では一般の学校とは違い個々の集団の連携を強固にする理由からクラス変えは行われない。また、より現場の環境に近づけるために学年の違う生徒が同一のクラスになったりもする。各クラスの役割を第三者が見ても明確に把握出来るようにクラスごとの特徴を基にしたクラス名を付け、新入生は卒業生の穴を埋めるように学年的には二年生や三年生となる者たちのいるクラスへと配属される。

峰岸が所属するのは『第一歩兵小隊』である、標準装備として防刃効果の高いアンダーアーマーと防弾効果の高いオーバーアーマーを着込み。破壊力、射程、命中精度がある程度の基準を満たした突撃銃や破壊力のある近接戦闘用武器を扱う歩兵集団だ。要するに飾り気ゼロの普通の歩兵なのだが、ミドルからクロスレンジまで幅広い距離に対抗できる普通歩兵は陸の戦場では使い勝手がいい為、人数も多い。……というのは前世紀までの話であり、転送器の開発された昨今では使用武器などはその時の状況に合わせて自身の下に転送することが可能だ。よって状況や個人の適正によっては短機関銃

を装備していたり、狙撃銃スナイパーライフルを装備していたりする。更に天災後の身体能力の驚異的な上昇によって文字通り超人的な働きをする彼等は、どんな機甲兵器よりも低コストである意味万能でありそこそこ有用な駒であるため相変わらず人数は多い。

勝手知ったる総合戦技科の学科等の長い廊下を峰岸はフラフラと危なげな足取りで歩いて行く。その横で胸を張り、のらりくらりと歩く峰岸の歩調に合わせながら歩く白井はそんな峰岸を呆れと諦めの混在した目で見つめていた。二人は先日の入学式の時に引き続き、本日も制服を着ている。制服そのものが引き締まった印象を与える為、今の峰岸との相性は最悪だった。

口はだらしく開かれ、死人と見間違ふような土気色の肌をしている。充血した目の下には十メートル離れていても視認できそうな大きな隈くまがある。

「眠い。眠すぎる」

呟いた言葉には全く力が籠っていない。

「当たり前だ。睡眠時間を削ってゲームに熱中なんて……お前は小学生か？」

歯切れよく話す白井だが峰岸はそれ所ではない。

「思えば俺って大雑把に計算しても二日間は徹夜してるんだよな」

「ゲームでな」

すかさず白井が言い返す。

「馬鹿やろう。ゲームじゃねえよ。一昨日は春休みの課題だよ」

峰岸は二週間余りの休みに見合わない量の課題を一昨日、泣きながらやっていった。時系列的には入学式の前日になる。

「どの道自業自得だ。それに昨日はゲームやってたんだろ？」

確かにその通りだった。昨晚入学式の警備を終え寮に戻った峰岸は残った課題を八時間の激闘の末片付ける。時間は既に午後二十二時を回っていた。睡眠不足を自覚していたので少し早めに寝ようと机から立ち上がる。その時、峰岸の足に硬い何かが当たった。何かと思いい下を見ると、前日に買ったテレビゲームのソフトが落ちてい

るではないか。峰岸は少し考えた後、ゲームソフトを拾い、ゲーム機の前に歩いて行った。そして二日目の徹夜である。

「宿題を休みの最後に残しておいたのも、ゲームで徹夜したのも全部お前の自業自得だろ」

とどめとばかりに白井は畳み掛ける。

「白井よく覚えておくんだ。お前の言ってることは確かに正しい。だが正しい言葉が常に人の心を動かすとは限らない！」

今まで眠そうにしていた目をカッと見開きながら峰岸は何が言いたいのか分からない事を言っている。

「……結局何が言いたい」

当然こうなる。

「正論は時として、やり場の無い憤りを人に与えるんだよ。ワセリン君」

諭すような口調の峰岸。

「……もしかしてワトソン君のことか？」

初版の発行から数世紀を隔てた今も語り継がれる普及の探偵小説に出てくる登場人物の名前を、それもシリーズ化され見事にレギュラー入りした者の名前を間違えた峰岸に対する白井の口調には幾分かの哀れみが込められていた。

「いいんだよ。ワトソンだって名探偵の推理を助ける潤滑剤ワセリンみたいなもんだろ」

一瞬覚醒したかに見えた峰岸はというと再び眠そうにフラフラと歩いている。そんな彼を一瞥し白井は溜息を吐く。

「お前の冗談は分かりにくいんだよ……」

白井はそう呟くと危なっかしく歩く峰岸の後を追った。

第一歩兵小隊という札の掛かった教室に峰岸と白井が入ると同時に始業を告げるチャイムが鳴る。歩兵小隊の人数は三十名。現日本軍の小隊と同じ同一の規模だ。因みに中央戦技の総生徒数は、人数だけで言うと同日本軍の連隊とほぼ同一の規模である。

教室内には二十名の生徒が座っていて、皆峰岸と同じ制服を着ている。残り十の空席は去年卒業した生徒の席であり、その席を埋めるようにこれから新入生が配属されてくる。

「峰岸君に白井君。やっと来たんだね」

峰岸と白井が入ってきた事に気が付いた板井好男いたい よしおが二人に声を掛ける。違う学年の生徒が入り乱れる戦技校では他の学校より同学年の者同士の団結が強い。彼もそんな同学年の人間であるので峰岸や白井ともよくつるんで行動している。

彼の外見は良くも悪くも目立つ。サラリとした黒い髪は開いた窓から拭き込む風になびき、優しげに細められた眼には人を惹きつける何かの力があるのかも知れない。女性的なほっそりとした顎のラインをなぞる様に白く細い指を這わしている。

美しい女性と見間違ふような外見の彼は一見異性からの人気が高そうだが、実はそうでもない。高いには高いが彼に特定の恋人は居ない。その理由は彼の特殊な体質にあるのだが、基本的には優しく人当たりもいい板井は、クラスメイトとしては十分に馴染んでいる。

「板井お早う」

白井が恒例の挨拶を返す。

「そしてお休み……」

白井に続き言葉を発した峰岸は、そのままフラフラ自分の机まで行くと突っ伏してしまった。

「峰岸君どうしたの？」

心配そうな様子の板井に白井が言う。

「ただの眼不足だ」

そう言う白井も自分の席へと歩いて行く。

峰岸と白井が席に着くとほぼ同じタイミングで先ほど二人が入ってきた扉がガラガラと音を立てながら開いた。

十名の生徒が一列で入ってくる。生徒の様子は様々だった緊張した顔のものもいれば、入学早々嘗められまいという一種の必死さが伝わってくる者もいる。そんな具合に新入生達の反応は様々だ。

既に席についている者達の前に彼等は一列に並ぶ。少し遅れて峰岸達のクラスの担当教官である石渡が、ニコニコしながら入ってくる。

「はい、ちゅうもーく」

間延びした声で注目既に席に着いた生徒に注目を促す石渡。基本的に戦技高校の生徒は教官の支持には素直に従う。今も石渡の言葉に応えるかのように生徒達は彼に視線を向けている。そんな中で他とは違う行動をとる者が居ればやはり目立つ。スイカ畑に一つだけキャベツがあるようなものだ。

「みねちゃん、今はまだおねむの時間じゃないわよー」

机に突っ伏し、者の数秒で深い眠りへと入ってしまった峰岸は石渡の声が聞こえている筈もない。石渡の声にも無反応で寝ている。

「しかたないわね……」

憂いを含んだ溜息を吐きつつ石渡は寝息を立てる峰岸に近付いてゆく。机に座っている生徒達は彼の行動を見た途端次に彼が取る行動が予測できた。教室に入ってきた生徒とやたら嬉しそうな顔の板井以外の人間は耳を塞ぐ。

既に峰岸の席まで歩き終えた石渡が大きく息を吸い込む。そして次の瞬間、その空気を音に変換して一気に放出する。

「おい峰岸い！！テメ工俺の前で堂々居眠りとはいいい度胸だなあ！
！とつと起きねえか馬鹿野郎！！」

大地を震わせるような大きく低い声だった。あまりの音量は窓ガラスが細かく振動する。耳を塞ぎ損ねた生徒は予想だにしない音量が鼓膜に深刻なダメージを与えたようで顔を苦痛に歪めながら耳を押さえている。板井だけは例外で、ダメージを受けながらもなにやら恍惚とした表情をしている。

突っ伏した状態から勢いよく顔を上げた峰岸は、突然の轟音に軽いパニックを起し周りをきよるきよる見回している。そのうち視界に石渡の姿が入った。

「あれ、石渡先生……お早うございます」

自分の近くに石渡が立っていることに気が付いた峰岸は取りあえず挨拶をする。

「お早うじゃないわよ。まったく……出鼻を挫かれた気分よ」

相変わらず無然とした声色だが話し方や声の調子はいつもの石渡のものだ。

「出鼻？先生の鼻は低い方だと思いますけど」

「あたしの鼻の高さは関係ないわよ！それわざと？わざとよね？悪意しか感じられないんだけど！」

石渡のコンプレックスである鼻を容赦なく攻撃した峰岸の心無い言葉に傷付いた様子の石渡。内ポケットから手鏡を出すと憂いの籠った仕草で自分の鼻を映す。

「あたしの鼻が後二センチ高ければ……」

「高ければ、なんですか？」

石渡の呟きに峰岸が眉を寄せながら問う。

「あたしの美貌も完璧なものになるのに……まあ、あまり完璧すぎという角も立つし人間一箇所ぐらい欠点があるくらいが丁度いいわよね？」

勝手に持ち直した石渡は言い終わると峰岸に向けて小さくウィンクした。

「先生、目はしっかり見えてますか？」

「ばつちり見えてるわよ。なんだって今日の朝食はブルーベリーパイよ」

上機嫌で応える石渡に峰岸はげんりした声で言った。

「先生、まさかそんな妄言の為に俺を起したわけじゃないでしょう」
学校で堂々と居眠りをしていた人間とは思えない発言だった。

「ああ、そうそう忘れてたわ。ごめんなさい」

しかし、話が脱線していたのも事実だったのでこれ以上峰岸が怒られることもなかった。石渡は少女じみた小走りで立ち尽くす新生の群れに戻ってゆく。

「はい、みんなお待ちませ。それじゃあ順番に自己紹介をしてもらおうかしら。それじゃあ一番右端のあなたから順番にお願いね」

そう言って新人生達に自己紹介を促す。

自己紹介の内容は特に決められてはいないそれぞれがやりたいように自己紹介を行うのが戦技高校の自己紹介だった。緊張しながらも言葉をどうにか紡いでゆく者や、ふてぶてしい態度の者、巧みな話術で上級生や新人生の笑いを誘う者。そんな十人十色の自己紹介も中盤まで差し掛かった時だった。

新人生の列の中から次に自己紹介を行うものが一步前へ出る。長い黒髪に赤茶色の瞳。シルクのように肌理^{きめ}細やかで白い肌をした少女だ。日本人離れた外見と端正な顔立ちのあわせ業で教室内の人間の目を自分に惹き付けてしまう。

入学式の日に峰岸と模擬戦をした少女だった。

「どーも、初めまして。先日関西戦技からここに転校してきました佐世保紗瀬穂います」

人形のような外見とは裏腹に軽快な口調で話す佐世保。大した事を話しているわけではないが、声の調子と独特のテンポの関西訛りの混ざった口調でどこかひょうきんなイメージを与える。

「因みにこの子、昨日みねちゃんとの模擬線で殆ど互角に戦ってたから来学期の合同体育祭では戦力として期待できるわよ」

峰岸は石渡の言葉に内心舌打ちする。理由は簡単。余計な事を言ってくれるなという思いが急速に膨らんだからだ。面倒な事にならないように新入生達の中に佐世保の姿を見つけた時も知らない振りをしていたのに、そんな自分の計画？が一気に崩された。

『なにに！？』などという複数の声と共に同じかそれ以上の数の視線が峰岸に集中する。

「峰岸一体どういう事だ？演習にかこつけて美少女とくんずほぐれつなんて……」

長く伸ばした髪を後ろで束ねた少年が思春期丸出しの勘違いで口火を切った。

「してねえよ。耳鼻科と脳外科の両方で診察受けて来い。どっちかで異常が見つかるはずだ、ひやま檜山」

峰岸が切り返すが、その声はそれ以上の数の声により相殺された。「峰岸君って男の子にしか興味ないんじゃないやあ」

「触ったのか？彼女に触ったのか？どこかまずいところに触って彼女の気に触るようなことはなかったのか？」

「手を抜いて接近し……中々の策士じゃないか」

この声はほんの一部で峰岸が何とか聞き分けられたものだ。後は好き勝手まくし立てる生徒同士の声が入り混じり、かき混ぜられガヤガヤとした騒音にしか聞こえない。

最早言い返す気すらしない。峰岸は騒音から耳も目も逸らし窓の外に広がる快晴の空を眺める事で逃避を始める。更に一言呟く。

「洗濯物干しとけばよかったな」

峰岸を襲った質問攻め？も一段楽すると今日のところは解散となった。本格的な訓練は明日からで今日は他の学校同様顔見せ程度のものだ。石渡が解散を指示した途端、ガヤガヤとした楽しい喧騒が広まる。峰岸も一刻も早く寮に帰って足りない睡眠時間を補おうと早々に教室を後にしようと手際よく荷物を纏め席を立った。それを見た佐世保が峰岸に近付いてくる。

「竜介」

親しげに下の名前を呼び、少女漫画のヒロインよろしく。背景がお花畑でもおかしくなさそうな様子でこちらに向かってくる。帰ろうと足を踏み出しかけていた竜介の体がピシリと硬直する。教室中の注目が佐世保と峰岸に集まる。彼女に話しかけようと自分に気合を入れていた男子がショックを受けた表情で自ら峰岸に近づく佐世保を見ている。

次第に佐世保の顔に邪気を含んだ笑顔が展開される。その瞬間、竜介は思った。こいつは確信犯だと。自分の容姿が優れていることを自覚し、その一挙一動が思春期の男子の目を惹きつける事も、峰岸があまり目立つ事を好まない事も、その後男子生徒が抱く嫉妬や羨望を含むドロドロとした感情が峰岸に向く事も、全てを分かった上でのあの行動だ。

佐世保紗瀬穂……恐ろしい子。

「なんや、自分意外と人気者やん」

開口一番そんな事を言っただけの佐世保はいやらしくニヤニヤと笑っている。

「お前、俺をいじめてそんなに楽しいか？」

「別にいじめとるわけやないやん。ちよつとしたコミュニケーションンってやつや」

峰岸からしてみれば本当に、本当に殴り倒したくなるような顔をした佐世保である。

「そのコミュニケーション、明日でいい？」

心底嫌そうな顔で峰岸は言う。例えるならば、泣いている女の子にキザったらしくハンカチを差し出したまではないが、そのハンカチで鼻をかまれ、鼻声でありがとうと言って反されたハンカチにふと目を向けるとその子の鼻糞が付いていた。そんな顔だった。

「連れないやつちゃんあ」

そんな峰岸を見た佐世保がつまらなそうに言う。途端に峰岸の周囲から無言のプレッシャーのようなものが圧し掛かってくる。何事かと周りを見てみれば、先ほどまで各々で勝手な話で盛り上がっていた面々が筆舌につくし難い形相で峰岸を見ているではないか。

（峰岸の癖に美少女からの誘いを断るだと？）

無言だが彼等がそんなニュアンスの事を頭の中で考えて、爆発直前のグレネードのようになっていたことは想像できた。中には鞆からハンドガンを取り出しスライドを後ろに引くものまで出る始末。

「……ええつと少しだけなら」

「ホンマに？」

佐世保の表情が途端に明るくなる。その直後の事だ。先ほどまでの張り詰めた空気は消えたが、その代わりに体中に絡みつくようなドロドロとした気持ちの悪い想念が峰岸を取り巻く。視線だけではない。藁人形と五寸釘を取り出し、額に火の付いたろうそくを鉢巻の様なもので括り付けているものもある。

（あれ？なに、この空気？俺何か悪いことした？何もしてないよね？つーか何？これって「はい」と「いいえ」どっちを選んででも不穏なフラグが立つパターンじゃない？てことはアレだ。もっと前にとった行動で既に俺の命運は決していたと？いや落ち着け。考えるん

だ竜介。こういうときはアレだ。一度ロードしなおして……できるわけねえじゃん！！なんだよロードって。ロードはおるかセーブすらねえよ！！誰だよ人生からセーブ機能取り外した奴！！何、どうするのこれ。どう收拾つけるの！？）

あたふたするゲーム脳峰岸の頭で、非現実的な思考ぐるぐると回っている。

「なにキョドつとんねん」

佐世保は峰岸の頭にチョップを入れる。

「ははーん。さてはアレやな。自分こんな可愛い子と話した事ないもんで、緊張してもうてどうしたらええか分からないんやろ？」

（なに言っちゃってんのこの子お！！痛い、痛すぎるよ！！痛いのが好きな板井くらい痛いよお！！）

「まあ安心せえ。エスコートは異性との交友も広いうちに任しとき」
そう言って任せると言うように握りこぶしで自分の胸をドンと打つ佐世保。

（変な勘違いしてんじゃねえよお！！ああ、もう帰りてえ。帰って今すぐお日様の光を浴びたふかふかの布団で爆睡してえ）

「というわけで行くで」

佐世保は峰岸の手を取り歩き出した。

教室中の視線が繋がれた手に集中する。そんな視線を感じ、峰岸は全身汗まみれ。無論冷や汗である。手汗もべっとりだった為、佐世保の手が峰岸の手からすっぽ抜けた。

「おわ！！なんやそのぬるぬるした手は？自分手にローションでも塗つとるんちゃうか？」

更に冷や汗を掻く。脱水症状を起してもおかしくない量だ。

「ローション……？」

何処からかそんな声が聞こえた。

「ローションを塗った手で……」

ガチャリと撃鉄を上げるような音が聞こえる。

「佐世保さんに……」

複数の気配が近付いてくる。

「何をする気だった？」

後ずさりたくても四方を取り囲まれ、それすら叶わない。

「お、落ち着け！！話せば分かる。悲しい誤解なんだ」

迫り来る危険に必死の弁明をする峰岸。その時、峰岸を守るように中央に躍り出た人物がいた。板井だった。

「みんな、こんな事止めてよ！」

必死に仲裁を行う板井が峰岸には天使に見えた。

「板井……」

峰岸の口から零れ出た言葉には感謝や感激の念がにじんでいる。

「どうしてもというなら僕を殴ればいい。というか殴ってください！！さあ、そのやり場の無い理不尽な怒りを理不尽にぶつけて下さいお願いします！」

そう言い終えた板井はなぜか上半身裸になると、さあ来いとばかりに両腕を広げてみせる。教室にん誇っていた女子の一部が歓声を上げる。

「本音はそっちかい！」

肉体的、精神的を問わずに痛みをこよなく愛し、自らを逆境に追い込む術においては右に出るものなしと言わしめる板井好男。またの名をザ・ペイン。

甘いマスクで多くの女子を魅了するかに思えたが、彼の特殊な性癖についていけるものは少なく女子の間ではもっぱら勧賞用として重宝されている。要するに寛容植物や熱帯魚のようなものだ。

歓喜に震える板井の背中に向けて思わず突っ込んだ峰岸だが、彼は背中を向けたままでこう返した。

「峰岸君……誕生日にこんな素敵なプレゼントを僕にくれるなんて君はやっぱり最高だ。ああ、友達を庇って理不尽に暴行を受ける僕。容赦なく浴びせられる罵詈雑言。僕は、僕はなんて不幸なんだ……」
「いや、もういいよ。帰れお前。お前がいると話がややこしくなるから頼むから帰ってください！」

「そんな、ここに来ておあずけを食らうなんて酷いじゃないか。でもよく考えると　目の前のご馳走を取り上げられるというものも　それはそれで……いいかもしれない」

「なんでそんなに幸せそうなんだよ！なんですか！？この間違った方向へのポジティブシンキングは！」

「幸せ？何を言うんだい見ての通り今僕のおかれてる状況は危機的状況。とても幸せとは呼べない場面だよ」

両腕を広げながら満面の笑みの板井。彼はある意味一番戦場への適正が高い人間だった。

だが、先ほどまで血走った目で峰岸ににじり寄っていた男子生徒も板井の行動に若干引き気味の様子だ。彼は疲れたような口調で口を開く。

「あの……なんかごめん。よくよく考えたら逆恨み以外のなんでもないよこれ……俺もう帰るから」

「　　っえ！？」

完全に怒りをそぎ落とされた男子生徒の思わぬ言葉で板井は捨てられた子犬のような目つきになる。

「ち、ちがう！君達の怒りはごもつともだ！だからその正当な怒りを、理不尽に僕にぶつければいいじゃないか……」

縋るような口調の板井。

「あ、俺も帰るわ。じゃ、じゃあな峰岸。その……佐世保さんと仲良くな」

「だから誤解だっつーの！」

「俺も、なんか悪かったな峰岸最近彼女に振られたもんでつい……」

「お、おう。お大事にな」

完全に冷静になった男子生徒の口から謝罪の言葉が出る。

峰岸は律儀に一人一人に言葉を返し、次々と出てゆく生徒を見送る。

「待って！！待ってよーーーーー！！！！」

板井の悲痛な叫びを背に受け、逃げるように教室を出る男子生徒

たち。

そしていつの間にか教室には峰岸と佐世保そして地面に跪きガツクリと頂垂れる板井の三人が残るのみとなった。

「結局、お前に助けられた形になったのかな。まあ白井お前の望むものはここを無事に卒業して戦場に出れば直ぐにでも叶うから、元氣出せよ」

（何だこれ？なんかこの励まし方おかしくねえ？）

頭ではそう考えながらも同時に板井を励ますにはこれだということ事も経験測で知っている。峰岸は首を傾げながらも板井のもとへと近付いて行く。

しかしその歩みは唐突に止まった。ガツクリと頂垂れた板井が、なにやらブツブツ言っている。一瞬ショックで壊れてしまったのはと心配になった峰岸だがそうではなかった。

「フフフ……これは放置プレイ？そうだよな？フフフフフ……いかも。新境地を開拓しちゃったかも……ウフフフフフ」

何処までもポジティブなのが板井だという事を峰岸は失念していた。あらゆる苦痛を快と成し。絶望的な状況であればあるほどそれと同じく希望も膨れる板井の特異な人間性のことだ。

「もういい、帰ろう」

疲れたように峰岸が呟く。

「中央戦技には凄いのがおるわ」

珍しい生き物を見るような目の佐世保は感慨深げな口調だった。

「そう言えば、もとわといえはお前の責任じゃねえか……」

すっかり存在を忘れていた佐世保を峰岸はジト目で睨む。

「いやー、スマンスマン。流石に悪ふざけが過ぎたわ。飴ちゃんやるさかい許してな」

ゴソゴソとポケットをまさぐる佐世保。

「いらねえよ……とにかく俺もう帰るから」

欠伸を一つしながら峰岸が言う。

「ちよっと待ちい」

「ぐえ！」

峰岸が奇妙な声を上げたのは風を切って歩き出そうかと足を踏み出した峰岸の後ろ襟を佐世保が唐突に？んだからだ。

「まだなんも話とらんやろ」

痛そうに喉を押さえながら峰岸が振り向く。

「なんだよ」

若干苛立った声で峰岸が言った。

「もうすぐある遠足の班編成まだやろ？」

遠足。どこか浮ついた雰囲気の中だが戦技校の遠足はそんな生易しいものではない。そもそも遠足は生徒達が勝手につけた呼び方で正式名称は緊急時山岳歩行演習だ。文字通り、緊急時下での山岳歩行を想定した演習で水や食料は現地調達。武装は最低限、更に政府が研究するモンスターじみた実験動物の生息する山を数日かけて踏破するという荒行だ。

生徒達の最低限の安全を確保する為、各班に教官が護衛として付くのだが、彼等は基本的に何もしない。本当にまずい状況にならない限り出てこない。もしも彼等の助けを借りたときはそのチームは失格。踏破はならずという事で成績にも最低ランクのEが付く。

当然生徒達のレベルに個人差があるため、生徒達は危険度の違う複数のルートの中から一つを選択し、演習に望む。

峰岸は一番簡単に踏破できる学園内にある第十六演習場のコースを選択するつもりだった。

「班編成はまだだが……おまえどのコースにする気なんだ？」

峰岸の言葉に若干言い淀む佐世保。嫌な予感がした。

数秒間気まずい沈黙が教室を支配した。やがて佐世保は、重々しい様子で口を開いた。

「最高難易度。富士の青樹ヶ原樹海や」

人生にセーフ機能はありません（後書き）

話の運び方が若干おかしいような気のする今回の話ですが、狙いは呼んだ方を笑わせたいです。

上手く笑っていたただけたでしょうか。私もギャグのセンスがあるわけではないのでどうなのかは分かりません。

独りよがりの小説にならない為に、ご指摘ございましたら感想等で知らせていただければ助かります。

低燃費だと思い込め（前書き）

頭の中で何かがぐるぐる回ってます……
とにかくどうぞ。

低燃費だと思い込め

「青樹ヶ原……」

眉を寄せながら呟く峰岸。新たに見出した快樂に頭の先までどっぷりと浸かっていた板井さえも呆気に取られた表情で佐世保を見ている。

「一緒に行かへん？」

言ってしまったって開き直ったのか、佐世保の口調はいつもの調子に戻っていた。一杯いつとく？みたいな口調だ。

「デートの誘いにしては随分風変わりな場所だなおい……」

峰岸は茶化すように言う。

「行かへん？」

茶化す峰岸を無視するようにもう一度佐世保が訊く。顔は真剣そのものだ。峰岸はゆっくりと大きな溜息を吐くと静かにしかしはつきりと言った。

「断る」

短い言葉だが、今の自分の意思を一番表している言葉だ。青樹ヶ原樹海は数世紀前から入ったら最後出るのが困難な樹海として知られていた。現在では天災の際度重なる隕石雨の衝突による衝撃で影響で少しばかり地軸がずれている。半ば亜熱帯化した日本には天災前では考えられないような危険な動植物が生息しており、青樹ヶ原はその中でも最悪だった。元々あまり人の手が入っていなかった樹海は規模を拡大させ、触れるだけで健康を害するような強力な毒草や、政府主導で進めている生物兵器研究で作られた化け物達。その中でも特に危険なものが樹海に投棄されている。

その危険度を表すかのように樹海の周りには高圧電流の通ったフエンスが巨大な虫かごの如く張り巡らされている。日本軍の特殊部隊が訓練で使うような場所である。一応緊急山岳歩行での選択ルートの中に青樹ヶ原という危険地帯があるにはあるが、ここ十年程は

挑戦するものが居ないという話だ。一介の学生が青樹ヶ原の踏破を目論むのは思い上がりや無謀といえよう。

それを分かっているからだろうか。佐世保は大して落胆もせず、しつこく食い下がるような事も無かった。

「……話はそれだけか？」

峰岸の問いに佐世保がゆつくりと頷く。

「スマンな……変な事で呼び止めて」

佐世保は何かを誤魔化すように笑いながら言うと、峰岸に背を向けた。

「ほな、うちも帰るわ」

背を向けたまま手を振ると佐世保は教室を出て行った。暫く、廊下を歩く佐世保の足音が聞こえていたが、その音も次第に小さくなりついには何も聞こえなくなった。

佐世保が教室を出て行くと、教室の中が途端に広くなったように思える。峰岸と板井以外の生徒は既に全員寮へ戻ったのか、昼下がりの教室であるにも関わらず辺りは不気味なほどの静寂が支配している。誰も座っていない机がきちんと整列された無人の教室その中で峰岸と板井は無言のまま立ちつくす。時間に見れば一分か二分だろうか。壁に掛かった時計の秒針が動く音だけがする教室で板井が言葉を発した。

「峰岸君……」

自ら服を脱ぎ捨てたはずの彼の上半身にはいつの間にかしつかりと制服が着られていた。

「なんだ？板井」

その声に峰岸が応える。

「青樹ヶ原って……」

「ああ、富士の樹海だ。理由も無く一緒に行ける場所じゃあねえな」
いつになく真剣な口調で呟く峰岸の横で板井が痛々しい顔になる。
別の意味で。

「僕、行ってもいいかも」

そんな馬鹿なといった表情で振り向いた峰岸は板井のその表情を見た途端納得する。

「お前、そればかりだな」

呆れて言う峰岸になにやら常人には想像不可能な光景を頭に思い描いているっぽい板井が、形容しがたい表情のまま言う。

「僕からドMを取ったら何も残らない……」

「いや、そんなもんを自分のアイデンティティのコアに持つてくるなよ！色々残るだろ。イケメンとかハンサムとか美男子とかが」

「それ全部似た意味じゃないか」

「いいじゃん、重要だよ。顔がよければ得なんだからよ。不細工は無口で皮肉っぽければ暗い奴だが、顔がよければそれ以外が同じ条件だろうとクールな人とかスタイリッシュな横文字に変換されたり俺は隣の婆ちゃんに蜜柑一個しかもらえないのに男前な弟は四個もらったりしてたし。チキシヨウオオオオオオ！」

過去の理不尽な出来事を思い出し峰岸は絶叫する。

「そんなに蜜柑食べたかったの？」

「違うんだから！蜜柑なんて全然欲しくないんだからね！」

なぜか、ツンデレ口調の峰岸。

「……欲しかったんだね」

戦技校の生徒達の寢床となる学生寮が建ち並ぶ生活エリアは小さな町のようになっている。学校で使う物や日常生活を送るのに必要なものが現金を払う事で調達できるようになっている。

要するにお買い物が出来る。学校で使うものとは勉強道具一式や武器弾薬などだ。もちろん、学校は武器や弾薬が支給されるのだが、メンテナンスをすれば長期に渡って使える銃とは別に消耗品の弾薬はそうはいかない。

生徒一人の弾薬支給量は年単位で決められている。そのため支給限度数を超えた者は自腹で弾薬を購入するようになっていくが彼等は学生であると同時に軍の訓練生であり、緊急時における予備兵力である。学費は無料、更に毎月決まった手当てが出ているので弾薬もその手当てで購入するのが一般的だ。

たとえ無駄玉を撃ち過ぎても生徒の保護者への負担はそれ程ないのだ。とは言っても弾薬も決して安くはないので無駄玉は打てない。射撃の下手な者ややたらめったら発砲する者が損をするシステムとなっている。

後は普段着を売る店や普通のスーパー、大手チェーンの飲食店などが無秩序に建ち並んだ雑然とした町並だ。

峰岸の寮はそんな雑然とした町並みから少し離れた場所に建つ青い屋根に白い樹脂製の壁という造りの二階建てアパート、その一室だった。昼飯の材料の入ったビニールを片手に、コンクリートの階段をトントンと上って行く。

階段を上り終えた先に伸びる通路の丁度中間辺り。峰岸は重そうな鉄扉の前で足を止めるとポケットからフロップディスクのような形状のカードを取り出す。そのカードを扉の横についた端末にある自動販売機のお札投入口のような場所に差し込む。差し込まれたカードは全部は入らずに、半分は飛び出す形になっている。すぐに短い電子音が鳴ると、重量のありそうな扉は信じられない程滑らか

な動きで横にスライドした。峰岸はカードの飛び出した部分を？み、それを引っかく。鍵の開いた自分の部屋へ踏み込むと、扉は独りで閉まる。

学生一人が生活するには十分な部屋だった。部屋に入っただけにガスコンロの付いたキッチンがある。板張りの床はやや煤^{すす}けてはいくものの腐った箇所もなく特に不自由はしていない。玄関を入っただけ左手には風呂とトイレがある。トイレは当然水洗式だ。

キッチンを抜けると更に二部屋。一方は学校関連の部屋としてあまり使われることのない勉強机や綺麗なままの教科書、それから武器や弾薬、グレネードなどの危険物がその辺に転がっている。

もう一方は日常生活を送る為の部屋だ。まずは、テレビ、ゲーム機が部屋の隅に置いてある。少し視線を手前に移すと季節外れのコタツが部屋の中央に鎮座している。コタツの上にはカップめん^{カップ麺}の容器が乗っっていてその中には鼻をかん^かだ時にお世話になったティッシュや役目を終えた割り箸などが入っている。隣にはゲームソフトが重ねられて置いてある。

多少汚い箇所はあるが、男子学生の部屋としては至極平均的な方である。峰岸は制服から白い長袖Tシャツにブルージーンズというラフな服装に着替えると昼食を作るべくキッチンへ向かう。

ビニールから取り出したのはまずは卵、そして残りご飯と一緒に炒めるだけでチャーハンが出来てしまうチャーハンの素という名の魔法の粉。以上の二つだった。

フライパンに油を薄く敷き、溶いた卵を流し込むと高温の油に低音のものを入れたとき特有の音が鳴る。擬音で表現するとジューだ。卵が固まりかけた所で炊飯器の釜にへばり付く往生際の悪い白米をフライパンに入れてゆく。後は時間との勝負。卵が完全に固まる前に半熟状態の卵を白米に満遍なく絡めてゆく。慣れた手つきでフライパンを振るたびにフライパンの中でほぐれた米が宙を舞う。フライパンから飛び出した米は孤を描くような軌道で空中を散歩し再びフライパンに戻ってゆく。時間にして一秒足らずの短い散歩だ。

哀れである。

最後に魔法の粉を上から振り掛け全体に馴染ませると面倒くさがりな峰岸の面倒くさがりな峰岸による面倒くさがりながら作られたチャーハンの出来上がりだ。

出来上がったチャーハンを皿に盛るとコタツ部屋へとそれを運んで行く。香ばしい匂いを含む湯気が峰岸の食欲をそそった。峰岸の腹から栄養を摂取せよとの命令が下る。しかし、チャーハンを食べようと手を伸ばした時に、ドアチャイムが鳴らされた。チャイムというよりブザーといった方がしっくり来るその音は、非常に耳障りで唯一この部屋で気に入らないものを挙げるとすればそのチャイム音だった。

食事の邪魔をしたのが忌々しいドアチャイムだった事もあり峰岸は不機嫌に舌打ちをする。

「はいはい、今出ますよ」

そんな事を言いながら玄関まで歩み寄る峰岸だが、彼の機嫌を更に損ねる事体が起こった。

ドアチャイムの連打だ。誰かは分からないがその誰かはドアの向こうで、チャイムを連打している。規則正しく鳴らされるドアチャイムは緊急事態を告げるアラートのようにけたたましい音を出しながら部屋中に鳴り響く。

「うるっせえんだよ！！ブーブーいいやがって。誰だチキショウ！！避難訓練やり過ぎて本当に火事が起きたときに避難しなくなったらどうするんだこのやろー！！」

ひとしきり叫んだ後、ズカズカと玄関へ歩いて行く。

峰岸はスライド式のドアの隣にある端末のボタンを乱暴に押す。するとそのドアが開き訪問者の正体が露になる。峰岸は相手を確認する前に叫ぶ。

「うるせえぞこのヤロー！！」

しかし目の前に建っていたのはヤローではなくアマだった。丁寧な言葉では女性。もう少し絞った言い方をすれば少女。その絞った

言い方を更に限定的にすると南野静香がそこ立っているという事になる。

「昼食中かしら……」

峰岸の怒声に怯む事も嫌な顔をする事もなく、南野は一言訊いた。むしろ動揺しているのは峰岸の方だった。名画『ムンク叫び』の絵に描かれた人物のような顔になっている。その顔になる過程で自分の顎からゴキンと不穏な音がしたのだが、今の峰岸にはそれすらも気にならない。だらしなく開かれ、元に戻らなくなった顎を両手で無理やり元の位置に戻すと何かが嵌る音がある。

「これはこれは南野部隊長……本日はお日柄もよく……天気にも恵まれ……」

悪代官にへつらう強欲商人のように手もみをしながらトンチキな発言をする峰岸。引きつった顔と本日何度掻いたか分からない冷や汗が彼の心情を表している。そんな峰岸を無視し、南野はハハキトク、スグカエレの電報のように言う。

「緊急事態、すぐ来なさい」

そう言っただけから動こうとしない南野。どうやら峰岸のことを待っているようだ。峰岸の腹から緊張感のない音になる。

「あの、内容は？」

「後で説明があるわ」

「昼食は？」

「冷蔵庫に入れておきなさい」

取り付く島もない。

「僕の腹も緊急事態なんですけど、燃料不足を告げるアラートが鳴りまくってますけど」

「停止ボタン押してあげようか？」

モタ付く峰岸にイラ付いた様子の南野は握り拳を作り、峰岸の目の前でチラつかせた。峰岸にとって南野の拳は刃物より恐怖心を駆り立てられる代物だ。

「そつだ。よくよく考えたら俺アレだ、ハイブリッド星の人なんで

す。ハイブリッド星の王子なんです。低燃費だから少ない燃料でも大丈夫。さあ行きましょう。燃料計は残りワンメートル切ってますけどすぐ行きましょう。だから打たないで……」

必死な顔で自分の燃費のよさをアピールする峰岸。

「すぐに戦闘服に着替えて。プラスチック弾の装填された短機関銃と電磁警棒。それからS・グレネードを初期装備。転送端末も忘れないで」

峰岸の言葉など聞かなかったかのように振舞う南野。自分の言葉全てを受け流された峰岸も言われたとおりの装備に着替えるべく一度部屋に戻った。

着替えを終えた峰岸が再び学科エリアへと戻ると、校門の前にはグレーの兵員輸送用装甲車が三台止まっていた。形状はリムジンと戦車を足して二で割ったような感じだ。エンジンを動かす燃料には『ミリオンライト』を精製し純度を上げたものが使用されている。一昔前の化石燃料のように燃料自体を爆発させているわけではなくミリオンライトから出るエネルギーを変電器という機器によって電器エネルギーに変換し動く仕組みだ。車両の正面には小口径の榴弾砲が付いている。窓も無いうえ、分厚い装甲に阻まれ中の様子は見えないが、一台辺り十人乗りだと計算すると全ての装甲車の中には三十人程度乗っている事になる。南野に促され、その装甲車の内一台の中に入る。

峰岸のクラス担当教官、石渡と各科の成績優良者、鎮圧部隊の精鋭と逃走する目標を追跡し攻撃する追撃部隊。さらに前線での戦闘中に負傷者などの救護を行う衛生兵と障害物の撤去を行う工兵の混成部隊である戦闘支援部隊の面々が乗っている。メンバーの中には

白井の姿も見て取れる。彼は普段通りの慔然とした顔である。

「来たわね」

入ってきた二人を確認した石渡が言う。どうやら峰岸が一番最後だったらしい。

他の二つの装甲車も同じようなメンバーが乗っているのだとしたら異例である。この装甲車のメンバーだけでも中央戦技オールスターズと命名できそうな人員ばかりだ。

峰岸は走行車内の面々をもう一度確認した。真っ先に目についたのは演習や部隊任務の関係などで峰岸とよく関わる三人だ。どの人物も中々癖が強そうだ。

大柄な体躯で刈り上げ頭の篠原博信しのはひろのぶはだらしく鼻の下を伸ばし、南野のウエスト辺りを眺めている。

装甲車の運転席に座っている褐色肌の平和島当夜へいわじまとうやはハンドルに両腕を置きその上に自分の顎を乗せていた。どこかふてぶてしい目付きで窓の外を眺めている。

女性としては短い髪型をした柏野美由紀かしのみゆきはTPOを完全に無視し、眠そうな半開きの目でどこか遠くを見据えている。腰には赤十字マークの描かれたポーチをつけている。

他にも学校内での成績優良者がずらり揃い踏みだ。多くの生徒は自分が何故呼ばれたのかを聞かされていないようで所在無さげにしている。

「状況を説明する前にこれから聞くことは他言無用でおねがい」

峰岸は一方的に呼び出してからそれは汚いのではという考えを抱いていたが、その事を口に出来るような空気でもなかったので黙っている事にする。

生徒達は否定も肯定もせずになだ石渡を見つめている。彼はそれを肯定の意と判断し本題を話だした。

「この学校にジャームの構成員が複数名潜伏している事が先ほど分かったわ」

峰岸を含め、その情報をはじめて聞かされた生徒が息を呑む。

「構成員はこの学校の生活エリアに複数の爆薬を仕掛けるつもりと
のこと」

その言葉に生徒達がどよめく。

「爆弾？」

「国際犯罪組織が？」

「おいおい俺達は一体何をやらされんだ？」

石渡の言葉で生徒達は口々に言う。

「静かにして質問は後で受け付けるから……」

その言葉で皆が静まる。石渡は少し間を開けてから静かに言った。
「今回の作戦は警察と軍との合同で行います。あなた達はいくまで
予備兵力だけどいざというときの為にここで待機していてちょうだ
い。何か質問は？」

「有名な国際犯罪組織が何故うちに爆弾を？」

すかさず白井が質問する。

「今のところ何らかの取引の材料にするためだと考えられているわ」
石渡が答える。

「情報元は何処です？」

篠原が低い声で訊く。

「あたしの口からは言えないけど確かな筋の情報よ。安心してちょ
うだい」

何かを誤魔化すような石渡。

「私達は誰の指揮で動いているのですか」

眼鏡をかけた女生徒が訊く。

「情報の提供元と同一よ」

またもあいまいな返答。

「潜伏している構成員のことは分かっているんですか」

今まで黙っていた南野が静かに訊いた。

「情報はあるわ。けど今分かっていている者だけで全員とは限らない。
だから不足の事体に備えてあなた達を呼んだのよ」

そこまでで質問は途切れた。ピリピリとした空気が場を支配する。

そんな空気に当てられたからだろうか、峰岸はとてつもなく重要なことを思い出す。

「石渡先生」

珍しく峰岸が口を開いた事で石渡を始め車内の生徒の視線が峰岸に集まる。峰岸の顔は真剣そのものである。

「あら、みねちゃん珍しいわねどうしたの？」

あまりに真剣な峰岸に気圧されたのか若干引き気味の石渡。

「飯は出るんですか？」

場違いな質問に車内の時間が止まる。

暫しの静寂の後、隣の南野が峰岸の後頭部をバレーボールのように叩いた。叩かれた場所から鼻先に抜けて行くような痛みが峰岸を襲う。

「空気を読みなさい！！」

「いやなんか空気がピリピリしてたんで皆も昼飯まだなんじゃないかと……」

峰岸なりに空気を読んだ結果がこれだ。

さらに何か言おうとした南野だが、それが言葉となって出ることにはなかった。

なぜなら彼女の腹部から空腹を継げるアラートが鳴ったからだ。車内の全員に聞こえるほどの大音量で長時間に渡りなり続けた。

「……」

「……」

南野は先ほど峰岸に施そうとしていた空腹アラートの緊急停止処置を自分に施す。要するに自分の拳で力の限り腹を殴ったのだ。音が止まった代わりに彼女の口からくぐもった声が出る。

その後は顔を真っ赤に染め下を向いて黙ってしまった。彼女にも恥じらいが残っていた事に驚いた峰岸だが、それを言葉や態度に出すのは自殺行為だと分かっているの、明後日の方を向きながら無言を貫く事を密かに決意した。

低燃費だと思い込め（後書き）

一応今回の話は第一部分の折り返しにと考えています。あくまで予定ですが……

というか誤字脱字多いですね。

そんな誤字脱字だらけの話をここまで読んで下さった方にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

自分で気が付いた部分はなるべく早く直します。

それから、もしもこれからもお話にお付き合いいただけるなら、もう少しだけ峰岸君達のことを見守っていただけると作者としても嬉しいです。

逝きたいけど生きたいです（前書き）

なんだろうかこのウスラ超展開は……

逝きたいけど生きたいです

南野のお腹が鳴ってから一時間弱。集められた面々はそれぞれの装甲車の中で待機していた。

峰岸は南野のお腹が鳴った時の事を思い出していた。水を打ったような沈黙のあと石渡が昼食を取っていない者が他に居るか訊いたすると驚いた事に結構な数の人間が手を上げるではないか。

そういつた事情もあり石渡は走行車内のメンバーから使い走りを適当に見繕い、皆の昼食を買いに行かせたのだ。その後、石渡は誰かから掛かってきた電話の応対をした後、急用が出来たと言い残して装甲車を後にした。

つまり、峰岸の空気を読まない発言と南野の腹の虫によって、昼食を取る暇もなく集められた生徒は昼食を取ることが出来たわけだ。結果オーライではあるのだが石渡から昼食摂取の権利をもぎ取った功労者の一人であるはずの南野は大人数の前で腹の虫を鳴らした事を未だに気にしているようだ。

少し前まで彼女はもっさりとした味の玄米パンを、もっさりとした動作で、もっさもっさと口に運んでいる。

今現在は体育座りの体勢でパックにストローのさされたフルーツ牛乳をちゅうちゅと啜っていた。

「おい、峰岸。お前のせいで隊長の元気がなくなってる件について少し話したい」

そんな南野を少し離れた位置から見ていた峰岸に、大柄な体躯の刈上げ少年篠原が峰岸に話しかけてきた。大きな肩を怒らせ、どこか可愛げのあるパツチリとした目を細めている。

「おいおい、言いがかりは止めるよ。隊長の腹が鳴ったのは生理現象だろ。屁えこいたりウンコしたりするのと同じことだろ。食ったらだす。出したら食うってな」

峰岸の言葉に篠原の目が吊あがる。

「隊長は屁なんかこかない！ウンコもしないんだ！」

必要以上に力を入れて言ったもので、篠原の声は走行車内に響き渡った。無論南野にも聞こえていそうなものだが、彼女はどこか遠くを見つめ、心此処に在らずといった様子だ。

変わりに篠原の言葉に反応したものがいる。ショートカットの少女、柏野が眠そうな目を篠原の方に向けると、締りの無い口から言葉をはつした。

「うるさいよお前は……少し黙れ。あとそれ以上こっちに來ないで、なんか気持ち悪いから」

ゆつくりとした口調で、自分より一回り以上大きな体の篠原に向かいそんな事を言う。

「何をいうかと思えば、なあ柏野……」

篠原は柏野に近付きながら何かを言おうとしているが、その距離が縮むことは無い。

篠原が柏野に近付こうと足を踏み出すたびに、柏野が同じだけ後ずさる。

「あの、かしのさん？」

「……」

相変わらず眠そうな目だが、彼女はいつ飛び掛られても対処できるような姿勢を保っている。

「近寄らないで、本当に気持ち悪いから」

檜野の言葉にショックを受けた様子の篠原はその場に立ち尽くす。

「峰岸い。俺、一体何がいけなかったのかなあ」

目に涙のようなものを溜めながら篠原は峰岸に言う。そんなやり取りに、今度は褐色の肌をした男前な少年、平和島が乱入してきた。ふてぶてしい目を面白そうに歪ませながら篠原の隣まで歩いていったかれは、篠原の方にポンと手を置くと言った。

「中々の嫌われっぷりだな篠原。今、どんな気分だ？」

「なんで、そんな残酷な事訊くの！？嫌がらせ？嫌がらせだよねこれ！」

篠原は目を一杯に見開き、溢れそうになる涙を必死に堪えていた。溜まった涙に光が反射している。泣きそうなのを堪えてるせいか、続けていった言葉も震えている。

「俺は板井じゃないんだよ！ぞんざいに扱われるのに慣れてないんだよ！ガラス細工みたいに繊細なんだよ！ちよつとした衝撃が命取りなんだから！いいの？割れたガラスみたいになっちゃうよ！触れるもの皆傷つけるくらい鋭利になっちゃうよ！」

「ガラス細工？」

峰岸は自らの特性をガラスに喩え、力説する篠原を胡散臭そうに顔を顰めながら見る。

「ガラスに喩えるのはいいと思うけど、あんたはガラス細工なんて高尚なもんじゃないよ。駄菓子屋で売っているラムネに入った安っぽいビー球。あれで十分……」

相変わらず篠原から距離を取り続ける柏野がゆつくりと聞き取りやすい発音で言う。

「つぶふ！」

篠原に一番立ち位置に近い平和島はさつと篠原から顔を背けたが、その際に堪え切れなかった笑いが固く結ばれた唇から漏れた。

「……」

絶句する篠原。目から堪えきれなくなった涙が流れ、鼻からは粘度の高い液体がぶら下っている。

そこに口を挟んだのは白井だった。

「いい加減にしろ。待機中とはいえ任務の最中である事は確かなんだ。少しは自重しろ」

「そつだ。お前ら自重しろー」

白井の尻馬に乗って残りの三人に言い放つ篠原。

「お前が一番うるさいんだよ。篠原」

三人の中で一番大きな声で話していた篠原に白井が言った。
「なんだと？」

問い返す篠原に残りの三人から言葉が浴びせられる。

「そうそう。でかい声で『隊長はウンコもしないし屁もこかない』とか言ってたし……」と峰岸。

「あれは気持ち悪かった。いや現在進行形でキモい……」と柏野。

「ウンコしないし屁もこかない、ねえ……アイドルに現実味のない幻想を抱いてる連中みたいだな」と平和島。

「お前ら……」

峰岸がよくやるゲームなどで、唐突に行われた誕生日会に誕生会の主役が感極まってこの台詞を言うシーンをよく見かける。篠原のお前ら、という言葉はそれとは先のそれとは真逆のベクトルからきているのだが声を詰まらせながら言う彼を見ているとそういういたシーンを連想しなくもない。

しかし、どこか毒を含みながらも、和やかな時間はそう長くは続かなかった。

音を立てて開く装甲車の扉から、先ほど出て行ったはずの石渡が姿を表した。

「みねちゃん、ちょっと来てくれかしら？」

石渡の口から出て来た言葉は、一応疑問系の形を取っているが、口調は有無を言わさぬものだ。峰岸は黙って石渡の元へと歩いてゆく。何も言わずにその場を後にする石渡に、峰岸は続く。

「警察のお偉いさんが、あなたを直接指名してきたの……」

総合戦技科の長い廊下を歩きながら、石渡は言う。

「はあ、なんか超展開ですね」

気のない返事をしたのは無論峰岸だ。

「一体どうということかしら……」

口をへの字にして眉根を寄せた石渡は誰に聞かせるでもなく言う。考え事をする際、全体的に顔のパーツが中心に集めるのが、彼の癖らしい事を峰岸はその時知った。

「相手は何処に？」

峰岸が言う。

「総合戦技科の職員室でお待ちしてもらってるわ」

石渡が相変わらず顔のパーツを中心に集めながら言う。

無人の長い廊下には、峰岸と石渡の足音だけが響く。さして大きな足音だが、戦闘服のブーツの材質が硬いためか、無機質なその足音は不気味な音で廊下を反響する。

ずらりと並ぶ教室の先に、つまり廊下の突き当たりにあたる場所に職員室はあった。

普段から異様な存在感を放つ職員室の扉だが、中からはそれを上書きするような気配がする。

「準備はいいかしら」

石渡は扉をノックする前の体勢になる。

「準備が必要ですか？」

石渡の言葉に、肩をすくめて見せる峰岸。

「おトイレの事よ」

その言葉を聞いて、峰岸は少し考えると無言で屁をこいた。ブークションのような音の屁だ。

「準備オツケーです」

無表情で言う峰岸。石渡は鼻を摘みながら頷くと、扉を二回叩い

た。

「入れ」

中年の男の声で告げられた言葉だが威圧感のようなものは感じなかった。ただ事務的な印象を峰岸は受けた。

「失礼します」

その時になつて初めて石渡は扉を開く。音を立てて開いた扉の中には二人の人間がいた。先ずは峰岸に出入を促したであろう中年の男が目についた。ゆったりとした感じの背広を着た中年の男は、長髪の白い頭髪を前髪ごと後ろで束ねている。剃刀のような切れ長の目は常人離れした知性を、頭髪と同じ色の吊り上った眉からは寧猛さを、それぞれから感じる。それを覆い隠すように柔和な笑みを浮かべるその男はさしずめオブラートに包まれた劇薬と言ったところだ。

その横に立つ若い女性。彼女はダークブラウンの髪を横に横に流し、わざとだろうか、目元のキツく見えるような眼鏡をかけている。細められた神経質そうな目は目尻が下がっているがその目は峰岸と石渡を警戒するように眺めている。中年の男と似たような背広を着ているが、体格が華奢なため若干の違和感がある。見ようによつては背伸びをした子供が大人物の服を着てしまったようである。手に抱えられた黒のセカンドバッグがその現象に拍車をかけている。

そして、峰岸は彼等のことを知っている。

職員室に入った峰岸は、石渡に気付かれないように中年の男に目配せする。

「……石渡君、すまないが席を外してくれないかね？」

「それは……構いませんが」

中年の言葉に石渡は若干逡巡するその視線は心配そうに峰岸を見ている。

「安心してくれ別に彼をどうしようというわけではない。ただ彼と二人で話したい事があるそれだけだ」

暫く迷う素振りを見せた石渡だが、やがて彼は小さく頭を下げる

と、黙って職員室を出て行った。

石渡の足音が次第に小さくなっていくのを確認した峰岸は自分が纏う雰囲気を一変させた。そして見た目が親と息子ほど違う、しかも警察の重役の男に向かって言う。

「西野、俺がこの学校で活動している間のコンタクトは無しだと言ったはずだが……」

峰岸は中年の男を事もあろうか呼び捨てにした拳句、上司が部下を叱るように言った。

「申し訳ありません。当初の予定を大幅に狂わすイレギュラーな事体が発生したので何とか隊長に連絡をと、このような強引な手段を……それにしても隊長、あのサインを人前で使うのはどうかと……」

件の西野は、気にした様子など微塵もない。それどころか峰岸の事を隊長と呼び、自分の上司のように扱っている。西野の言うあのサインというのは、軍隊のハンドサインのようなもので、以前峰岸が考案した意思伝達方法だ。屁によって指示を出すのである。屁の周波数を自由に変えることの出来る峰岸ならではのサインだが、その評判はすこぶる悪い。言葉を出さずに指示を出す事が出来るメリツトがあるが、とにかく臭い。

「おいおい、俺がこの学校での調査をする間、公特の指揮権はお前に任せたはずだがその辺は分かってるよな」

屁の事に関しては完全な黙秘を貫いた峰岸は眉根を寄せながら言う。公特の正式名称は公安特科^{こうあんてつか}。天災後に新設された課で文字通り公安部の公特である。国内での諜報機関や犯罪シンジケートの調査及び摘発といった警察としては特殊な捜査を行う公安部の中でも、一際きな臭い捜査を行う集団の名前が公安公特だ。諜報員としての仕事もこなすが、その性質は対テロ戦に特化しており。公に出来ない内容のテロなどを隠密に解決するのが、当初の設立目的だ。普通なら特課と略す方が語呂がいいのだが、これとよく似た外事特科^{がいじとつか}なる課も同じ公安部に存在するため、それはできない。外事特課は外特略^{とく}される。その性質も公安公特と似通っているが、こちらはどち

らかというと諜報に特化しているため、敵組織への潜入捜査などの危険な任務を請け負っている。

公特の責任者らしき中年の男は真面目な顔のまま言う。

「はい、重々承知の上でこちらに参りました」

年輪の刻まれた眉間に事の深刻さを表す皺をこさえた西野が重々しく言う。

「……分かったよ。一体何が起こったんだ？おじさんでなければ相談に乗るよ」

「よかった、本当によかった。館君^{たち}、例の資料を此処へ」

館といわれた女性はセカンドバッグから厚さが一センチほどにもなる資料を出した。それを見た峰岸の顔が引きつる。

「あの、さ。もしかしてその資料全部目を通すの？」

思わずそんな言葉が口から漏れる。

「いえ、重要なのは数枚程度で後は補完のためのものです。あらかじめ重要な資料は先頭にピックアップされています。他の資料は一応持つていくようにと隊長代理からの指示です」

応えたのは館だ。事務的に応えたとその資料を峰岸に渡そうとする。

膨大な量の紙束全てに目を通す必要はないと知り安堵する峰岸は黙ってその資料を受け取る。

さっさと読んでしまおうと最初のページを捲りに掛かろうとしたところで峰岸の手が早速止まる。最初のページは書類の機密レベルを表すものだ。機密レベルはダブルA。持ち出し禁止書類だ。どんな状況だろうと持ち出し許可は下りないから持ち出し禁止書類なのだ。何故この場に在るのかは推して測るべし。峰岸は無言で西野を見つめる。

「緊急措置です」

悪びれた風もなく言うてのける西野。これを理由に書類も西野も本部へ突っ返してもいいのだが、それをやったら、自分を信じて持ち出し禁止の書類を持ってきた部下の覚悟と労力を無駄にする事に

なる。義を重んじるわけではないが、その思いには応えてやろうと、峰岸は資料のページを捲る。

書類にはコンピューターで打たれたものと思われる見慣れたゴシック体の字で最近のジャームの動向に関する事や峰岸がジャームの破壊工作員の動向を監視する任務で、この学校に生徒として入学したことが事細かに書かれている。ジャームの日本支部に潜り込ませた外特の潜入捜査官からの情報もそこにはあった。彼等が中央戦技に爆薬を仕掛け、生徒を人質に日本政府と政治取引を行う計画を立てていた事や、その計画実行の直前にジャームの幹部が日本に潜入する事も、その計画を逆手に取り、ジャームの幹部を捕まえる特科の計画の事も事前に知っていた事だ。

二枚の書類に目を通したが、この一年で峰岸とジャームの潜入捜査官が本部に送った情報を要約したような内容で目新しいものはない。

しかし、三枚目の書類に目を通したとき、峰岸の眉が寄る。眉間には縦皺が三本。資料の文章を読み進めるうちに、峰岸の表情は陰しくなり。資料を読み終えたときには舌打ちをしていた。

資料には以下のように書かれていた。資料の内容は三日前からの綴りとなっている。

四月八日……ジャームに潜入中の外特捜査官、させば佐世保正捜査官及びたての館野恭二捜査官からの定期連絡が突如途切れた。この事から両捜査官は何らかの要因で潜入捜査官の身分がジャームに知れたものだと考えられる。

四月九日……館野捜査官のものと思われる変死体が神奈川県の住宅から発見される。死体は原型をとどめておらず、身元は所持品からの情報を元にした判断。現在、身元を断定するためにDNA鑑定を行っているが結果が出るまで一週間前後との事。死体には所々に彼の所持品と融合した箇所が見受けられる。これは生物が物質転送端末で無理に転送したときに見られる現象だ。このことから館野捜査官は物質転送端末でランダムな場所に送られたとの見方が強まっ

ている。佐世保捜査官の安否は不明。

四月十日……佐世保捜査官の死体が近隣住民の通報により群馬県の山岳地帯で発見される。死体には度重なる拷問の後が見られ、検視の結果、自白剤の反応も出ている。

資料の文章ははそこで終わっている。

峰岸は二度目の舌打ちをする。

二度の舌打ちにはそれぞれの理由がある。

一つ目は自白剤の投与により、こちらの情報がジャームにもれている事に対する舌打ち。

二つ目は殺された捜査官の片割れの苗字が佐世保であること。峰岸は潜入捜査官についての情報は全く与えられていなかった。知る必要もないし、下手に情報を知ればどこでもれるか分からない。絶対に知れてはならない情報は少数で管理すべきだ。

だからたった今潜入捜査官の身元をはじめて知った。一人は館野……この男に関しては面識がないがかなり酷い状態の死体だったと資料にはある。もしもあの世があるとしたら、そこでは安らかにいて欲しいと峰岸は心の中で手を合わせた。もう一人が佐世保、この苗字には聞き覚えがある。先日転校してきた少女であり、模擬戦で戦った少女でもあり。本日は遠足は青樹ヶ原に行くといい放ったあの少女だ。

「佐世保捜査官の家族は？」

動揺を悟られぬように峰岸は西野に訊く。

「妹が一人います。両親が早くに他界しそれから二人暮らしだったそうです。関西戦技を優秀な成績で卒業後、警察公安一科へ配属、ジャームへの潜入捜査へは自ら志願したようです。その際に彼は書類上行方不明扱いになっています。その妹も現在は関西戦技に在籍しているはずです」

峰岸は心の中では天を仰いだ。状況が許すなら本当にそうしたい。「妹の名は？」

「佐世保佐瀬穂です。どうしてです？」

やけに佐世保捜査官の妹に拘る峰岸を疑問に思ったのか西野は言葉の最後にそう付け加えてくる。

「いや、なんでもない。ただ、残された妹が不憫だと思ってな」

峰岸は具体的なことは言わず、わざとぼかした回答をする。それを聞いた西野の顔が興味深そうなものに変化する。

「ほう、ミリオンライトの恩恵をいつそう強く受けた隊長でもそんなウェットな精神があるのですか？永遠に老いることのない不老者という、人を超越した存在になっても……」

そこまで言った西野は自分の失言に気付いたらしい。しまったと言う顔で口を金魚のように口を開閉させている。

「それだけの時間を生きているからこそ、だ。分かるんだ、残される人間の気持ちは……」

天災当時から、老いることなくいき続ける不老者は、世界中を探してもごく少数しか見つからない。峰岸はその一人だ。不死ではないため病気や外傷で死ぬ事はあるが、彼等からは老衰という一番自然な死に方が出来ないのだ。当時よりも人数は減っているものの、今でも世界には少数の不老者が存在する。その身柄は各国の政府により厳重に管理され、峰岸が特課に配属されたのもそういう事情からきている。

二世紀近くもの時を生きた彼は記憶がかなり曖昧だ。百年以上前の記憶はないといってもいい。今では新しい日を迎えるたびに古いエピソードを忘れて行くのを自覚している。要領が一杯になったハードディスクの古いデータを消して上書きするように事務的に、データの重要性に関わらず片っ端から上書きしてゆくコンピューターウイルスのように無慈悲に、彼の記憶は塗りつぶされてゆく。それでもなぜか覚えている事がある。

大切なものを失ったときの感覚。失ったものの顔はもう思い出せない。家族か友人か恋人、はたまた器物だったのかすら分らない。しかしその時の感覚だけは、上書きされる事無く彼の体の芯に刻

み込まれている。上書きされずにその感覚は蓄積されてゆくのだ。
「ミリオンライトの恩恵か……呪いの間違いじゃねえの？」

口をついて出た言葉だった。無意識にそんな言葉が出てしまうほど、峰岸は寿命で死ぬ事の出来ない自分の体を恨めしく思っていた。唯一死ねるとしたら他人の手に掛かるか、自分で死ぬかの二択だ。

その二択のうち後者は出来ない。怖いからだ。長く生きれば生きるほど、人の死を見ればその数だけ、彼の死への恐怖は積み重なってゆく。後は誰かに殺されるしか手は無い。考えた挙句、峰岸はどのように結論付けた。

彼の生きた数十年、少なくとも公安公特^{こうあんこうとく}という部署に配属される前は大半の日々を戦場で過ごした。死に恐怖しながら死を求めるという矛盾した気持ちを抱え戦場で数十年の月日を過ごしたが、彼は未だに生きている。

事戦いに至って、峰岸は大した素質の持ち主ではない。しかし、数十年という月日を戦場で過ごした彼は、普通に老いる人間では積み重ねる事など到底不可能な量の経験を有していた。最初の数十年は運良く生きてきたのかもしれない。だが残りの数十年はきっとそうではないのだろう。経験という槌が峰岸という鈍らを極限まで鍛え上げた結果、屈強な戦士が一人生まれたのだ。

いよいよ自分は死ねなくなってしまったのかもしれない。そんな思いが予感から確信に変わった時、峰岸は戦場を去った。疲れたのだ。色々な意味で。

「すいません……隊長」

黙り込む峰岸を西野が心配そうに見ている。口調は二十年近く前に彼が公特に入隊してきた時のものだ。その声で峰岸は内面から現実へと視点がシフトするのを感じる。

「ん？ああ、気にするな」

快活に笑ってみせる。

「んじゃあ、これからどうするか考えるか」

峰岸は話を本筋に戻した。その後一時間ほどの間、峰岸、西野、

館の話し合う声だけが、職員室の空気を震わせていた。

逝きたいけど生きたいです（後書き）

ノープラン小説5作目です。超展開ですね。作者である私ですら脈絡のなさにビックリです。

そろそろ色々動いてください（前書き）

長い間更新しなかったのは書くのが面倒だったとか。読み返してみると色々酷かったので丸投げにしてみようと思ったわけではありません。決してそう云う訳ではありません。

そろそろ色々動いてください

脳内に直接情報を送り込み、普段は出来ない様な仮想現実として体験をする事が出来るようになったのは十年前のことだった。

当時は軍内でも仮想現実を使つての兵士の育成を推進していたが、結論から言えば、戦技高での仮想現実を使つての戦闘訓練は年に一五〇時間までと制限が付いた。仮想現実はどんなに本物に近付いたところで本物にはならない。見た目や質感をいくら本物に近付けて再現できたとしても。本物の戦場に付き物の死だけは再現できないからだ。何処までも本物に近い仮想現実での訓練は致命傷を負うと痛みもなく視界がブラックアウトする。そして薄暗いブースの中で場違いな安楽椅子に座り、一昔前に想像されていたサイボーグが被っているようなメタリックなヘッドギアを被っている自分に気が付く。

実際に死ぬ事を考慮しなくなると。実際は怖くて歩けないような地形や砲撃の中を平然で突っ切るようになる。

そしてあたかもゲームを楽しむかのように、仮想現実内の敵を殺してゆく。発砲や敵の殺害に対する感覚を鈍化させるのには役立つた仮想現実だが、狭い国土内で、兵力の絶対値が少ない日本軍はなるべく使いまわせる優秀な兵士の育成に力を入れていた。

そのために、諸外国よりも遥かな高待遇で、しかも一人当たり信じられないような金をかけて長年訓練して行く。教育に掛かった金額分も働かず、すぐに死ぬような行動をとる兵士は不良品であり、そんな生徒を大量に量産してしまうような仮想現実はその当時の教員達にあまり良い印象を与えなかった。

戦場に出た経験の少ない人間ばかりの学校内では莫大な資金を投じて開発された仮想戦闘モジュールは億単位のゲーム機と揶揄されるほどだった。しかし一方で本物の戦場に出た事のある兵士にはかなり優秀な教材であるとの声も上がった。さらに射撃の練習と言う

点においてのみ評価すれば、戦技校内でも葉莢が散らばらず。動く標的を打ち抜けると言うのはメリットであったため評価も一応は見直され、校内ではそのような規定になった。そんな経緯を経て、莫大な資金を投じて作られた仮想戦闘場は何とか無駄にならずに済んでいた。

その仮想戦闘場の中にはユーザーを仮想現実へと誘う黒いボックス状のブースが等間隔で配置されている。ブースの中には生徒がゆったりと寝そべれるくらいの安楽椅子が鎮座しており脳に情報を送り込むためのヘッドギアがコードに吊られ垂れ下がっている。ヘッドギアから伸びたコードはブースの上方へと抜け、そのコードが上のほうで束ねられている。無駄に太くなったコード束の向かう先は施設の天井に取り付けられている仰々しい機械へと接続されている。コード束が接続されている機械はこの施設の心臓と言えるメインサーバーだ。この部分で全てのブースの情報を管理しているため、この部位が壊れた場合、億単位の金をかけて作られた全てのブースは、ただの安楽椅子置き場に成り下がる。

平日休日問わず。この施設には誰かしら居ることが普通だった。真面目に射撃訓練をやりに来る生徒からゲーム感覚で来るような危ない生徒までその使用目的もかなり広い。

どんな気持ちでやろうと本心は本人にしか分からないのでそれについては致し方ない。

本日も多くが稼動する仮想戦闘モジュールの一台を使っていた佐世保は、ブースに備え付けられた安楽椅子にゆったりと腰掛け、メタリックなヘッドギアを被っていた。

仮想空間内の佐世保は瓦礫の山と化した町にいる。かろうじて残っている建物も大きな穴が穿たれていたり。焼け焦げていたりしているものが大半だった。自分の数百メートル後方には、海が広がっている。海面に太陽の光を反射させる海は壊滅状態の町並みとは対極を成す様に穏やかに波打っている。

街がこんな状態でなければさぞかし綺麗な港町であろうとか、そ

の破壊しつくされた町並みを見て私は戦争を憎んだとか、そのような感傷に浸るような事は全く無かった佐世保は現在、半壊したビルの屋上から対機甲ライフルに取り付けられたスコープを通じて移動中の敵部隊の動きを追っている。

敵の数は十人。一個分隊といったところで肝心の装備はというと着剣された突撃銃が大半で一人が狙撃手という編成だ。取り合えずリーチの長い銃を持つ狙撃手に向かって一発発砲する。機甲兵器の破壊を目的に作られた対機甲ライフルの弾丸は狙撃手の頭蓋をやすやすと砕いた。

西瓜のように弾け飛ぶ狙撃手の頭を見た敵は、素早く散開し、索敵を始める。何人かが警戒しながら佐世保のいる場所に近付いてくる。音速を超える速度で飛ぶライフル弾でも居場所がバレた状態であれば避けられる可能性が出てくる。更に敵も銃弾の飛んできた方向は検討を付けている様で上手く射線から身を隠すように移動してくる。特殊なセンサー類があれば障害物ごと相手を打ち抜くことが可能だが、そんなものは無い上に同じ場所から打てば確実に居場所がバレる。

バレたら最後、取り囲まれて終わりだ。佐世保は高さが十五メートルはあるつかというビルから一気に飛び降り、音もなく着地した。それから、地味な作業の繰り返しだ。敵の死角から弾を撃ち込み。見つかりそうになったら場所を変える。現代戦において最早万能とは言えなくなった銃器を使って相手を殺すには、相当離れた距離からの狙撃か物陰に隠れて気付かれる前に撃つか、簡単に言えば不意打ちでないと高確率で外す。

他には銃弾や砲弾が休む間もなく飛び交っているような激戦区でなら当たる事もあるかもという位である。

そんなこと理由から相手と適度に距離を取りつつ、見つからないように移動しながら各個撃破と言うのが現代においての銃撃戦だ。

仮想現実での射撃練習を終えた佐世保は、薄暗いボックスの中でノロノロと起き上がると脳に情報を送り込むためのヘッドギアを取り外した。

「……あつつ」

ブースの中には簡易式の空調設備しか無いため、気温の調節が効かない。思わずそんな声を上げてしまうのも無理の無いことだ。

涼しさを求めるようにボックスから出ると。佐世保の前に見知らぬ少女が立っていた。というより待ち構えていたと表現した方が正確ではある。おさげにした髪と幼く見える外見は何とというかかなりはまっていた。クリンとした目はどこか熱に浮かされたように潤んでいて得体の知れない力に押されたように佐世保は一步後ずさる。

「あ、開きましたよ」

若干顔が引き攣らせながら体一つ分横にずれると、自分が今まで使っていたブースの入り口を開けた。

しかし、相手はブースに入らずに体が横一つ分ずれたはずの佐世保にいつも間にか正対するようなポジションを取っている。逆にずれると彼女も逆に、その逆にずれると彼女もそれに習った。

表情はなぜかつとりとしている。

理解不能だった。彼女は一体何がしたいのだろう。まさか自分の真似をするのが楽しいわけではあるま

い。横に移動してただけの行動を真似たぐらいでこんなアブナイ表情になるのであれば、逃げなくては。関わらないのが正解だ。

そのような思考が瞬時に展開され一刻も早く目の前の危険人物を抜き去ってしまおうと、足に力を込めた瞬間、佐世保は今まさに抜き去ろうとしていた危険人物に腕をつかまれてしまった。

「う……」

心底嫌そうな声を上げる佐世保を知ってらずか、腕を引っつかむ少女はまくし立てるように話し出した。

「今の仮想戦闘、モニターで全部見てました。私、すごい感動しま

した」

ブース内で行われている仮想戦闘の様子は、ブースの外のモニターで見ることが出来る。一人称での視点と三人称での視点をボタン一つで切り替える事が出来る。どうやら彼女は仮想戦闘中の佐世保の様子をずっとモニターで見ていたらしい。

「え、な、か、感動？」

全く意味不明な電波ちゃんではない事は分かったが、仮想戦闘とはいえ殺し合いの場面を見て感動したというのはどうなのだろうかと思ってしまう佐世保は、自分をまだまともであると分析した。

「凄いですよ。相手に見つからないためのポジション取りとか一撃で敵をしとめる射撃の腕とか。一度お手合わせ願いたいくらいです」
「なんというかあまり関わらない方がよさそうな子だった。こういった学校には時々いるのだ。戦闘を純粋に楽しむことのできる。バトルマニアとも呼べる存在が。」

「ほ、ほんまですか？そらおおきに。お褒めに預かり光栄至極ほなさいなら」

彼女がトランス状態になっていくうちに佐世保は足早にその場を後にしようとしたが、再び腕が？まれる。

「……私と、一戦やつてもらえませんか」

少女は今しがた佐世保が出てきた仮想戦闘モジュールを指差す。
おそらく仮想戦闘モジュールでの対戦を申し込んでいるのだろうが、これがきつかけで付きまとわれるのはごめん被りたかった。

「あの、ほら仮想戦闘モジュールはやりすぎると精神衛生上よくないやん。だから、その今日は勘弁してもらいたいんだけど」

目の前にいい例も居るしとまでは言えなかった。

しかし、図太そうだと思っていた少女は、佐世保の言葉を聞くなり見るからに萎んでいった。

「そうですか。あの、すいません。無理言って困らせてしまったみたいですね。」

「ああ、いやいや別にええんだけど」

意外にも殊勝な態度を見せた少女に驚くと共に少し悪い事をしてしまったかも知れないと思い始めた佐世保に、少女は縋るような目付きをしてこう切り出した。

「それじゃあせめて、今から私がやる仮想戦闘を見ててもらえないでしょうか。終わった後で一言もらえればいいですから」

此処が妥協点だろう。佐瀬保は最初に彼女の要求を跳ね除けてしまったのでこれぐらいは付き合ってもいいかもしれないと判断した。「分かった。けど見るだけや。アドバイスなんて出来ないと思うけどそれでもええ？」

「はい！ありがとうございます」

その言葉を聴いた途端少女はひまわりのような笑顔になると、大きく頭を下げてブース内へと入っていった。

（なんか、あの子が笑って違和感感じなかったのって、今が初めてやな）

「それどころか。少し可愛いと思ったやん。あほんだら。騙されたらあかん。騙されたらあかんぞ」

先ほどの板井といい、今しがたの少女といい。この学校の変人籍率は全国一も知れない、と佐世保が思い始めるのも無理のないことだった。

「なあ、妙だと思わないか？」

「といたしますと？」

峰岸の言葉に西野が応じる。すっかり人気の無くなった職員室で開かれた緊急会議は峰岸のそんな一言で急速な議題の変換を余儀なくさせた。

「相手は何故わざわざ俺達に死体を見付けさせるような真似をした？ 相手が両捜査官からこちらの情報を得ているならその情報を使ってこちらの裏を掻くことも可能だ。死体さえ発見されなければ後はどうにでも誤魔化せる。わざわざ死体を晒しているのはメリットを潰す行為にしか思えない」

「偶然ではないでしょうか？ 死体発見場所は人里離れた場所で普段からあまり人の寄り付かなかった場所ですよ。こんなに早く発見されるとは相手も思わなかったとか」

峰岸の推測に西野概論を唱える。

「そうですね。第一発見者にしても日常的に現場に訪れていたわけではなく。頻度としては一ヶ月に一回ほごらしいです。このことは複数の周辺住人などの証言もあります」

西野の異論に館が補足する。

「本気で隠そうとすれば他にやりようはいくらでもある。活火山の火口死体を投げ入れてもいい。冷凍した死体を業務用の粉碎機にかけて魚の餌にしてもいい。人通りの少ない場所にただ埋めたり隠したりと言うのは奴等にしてはお粗末だと思うんだが」

峰岸がたった今提示した死体を隠す方法の例。そのどちらかを具体的に想像したであろう館があからさまに不愉快そうな顔をしたが、西野は気分悪そうに唸りながつら頷いた。

「まあ、奴等^{ジャーム}だったならそれぐらいはやるかも知れませんが。だとしたら私も腑に落ちません。死体を我々に発見されるのが織り込み済みならば彼等に一体何のメリットがあるのですか？」

「メリットは無いな。どう考えても。わざと死体を発見させて俺達を混乱させるのが目的だとしても、混乱した分、向こうだってこっちの動きが読みにくくなるはずだ。十分なアドバンテージを捨ててリスクをとるような真似はメリットとは言えない」

「それではやはり死体が発見されたのは、連中のミスと言うことでは？」

西野と峰岸の間にさりげなく自分の意見を滑り込ませる館。

「まあ、そう結論付けるのが楽ではあるが、やはり少し引っかかるな。少し視点を変えてみよう」

「視点ですか？」

訝しげな顔の館に構うことなく、峰岸は続ける。

「何故奴等が死体を発見されるようなミスを犯したかではなく、仮に死体を発見されてもデメリットが存在しない場合、どういったケースが考えられる？」

「たとえば、死体が発見されたところで、目的の遂行に支障が出ない……まさか」

西野は自身が発した言葉で、何かを理解したように固まる。館も似たような状態だった。

「多分、爆弾云々の計画はブラフだ。本来の目的は別にある。それにこれは推測にもならないカンに近い物だが、情報が向こうに渡りすぎている。潜入捜査の訓練を受けた外事の捜査官が二人もいて両方とも身分がバレるようなボロを出すか？ありえないだろ。恐らく警察組織の中にジャームに情報をリークしている者が居る。特化に所属するものを知る人物はかなり限定されてくる。内通者がいるとすれば幹部クラスだろうな」

断定に近い峰岸の台詞に言葉を失う二名の表情は似たようなものだった。眉間に皺を寄せ、何かを考え込むようにしている。推理というには状況証拠も論理性も足りない。しかし、それをただの妄言で済ましてしまうのは捜査官としてのカンが許さない。なにより、峰岸の仮説が正しいとすれば、警察組織そのものが危うい。

「隊長が言ったことに対して、失笑できればどれだけいい事か、な
ど考えたのは長い警察官人生の中でも今日が初めてです」

「とにかく内部に裏切り者が居るかもしれない以上は迂闊に行動で
きない。ここは一つ警察外の組織に動いてもらう」

「軍ですか？」

こと、会話がそこまで進むと職員室の三人は示し合わせたかの
ようにドアの方を見やる。

「そういう事なんでそろそろ入ってきてもらっていいですか？南野
さん」

少し間がありゆつくりと開いたドアの先には、峰岸の言うように
石渡と南野がさもそこに居るのが当たり前のように立っていた。

「盗み聞きなんてしなくても後で全部話すつもりでしたよ。現在、
軍と警察は協力関係ですから。そうでしょ南野少尉。今は昇進して
大尉でしたか？」

「まずは鎮圧部隊長とその部下という設定のおままごとに付き合っ
ていただき感謝します。盗み聞きについては悪いとは思いましたが
軍と犬猿の仲である警察の情報を鵜呑みにできるほど綺麗な部隊で
はありませんので。峰岸君の古巣でもあるしその辺の事情は分かっ
てると思うんだけど」

かしこまったような敬語から始まり、最後には完全にいつもの口
調に戻った南野は言葉を言い終わると同時ににんまりと妖艶な笑み
を浮かべる。

「おままことならもう少し優しく接してくれてもよかったと思いま
すよ」

表情こそ苦笑いな峰岸だが、口調はわりと切実である。

「あら、十分優しくしたつもりなただけ。それとも前線から二十
年も離れる間にこっちの環境に慣れすぎた？」

「そうかもしれません……おっと、そうだった」

ここで峰岸は思い出したように自分の部下二人を南野に紹介する。
峰岸に紹介された西野と館は探るような目つきでのまま南野に頭を

下げる。

「初めまして陸軍の南野です。一応峰岸君とは古い付き合いなの」
彼女も簡潔な自己紹介を済ませる。

「古い？失礼ですけど随分とお若いようですが」

訝しげに問う西野に南野は事も無げに言う。もっともおおよそど
ういう事なのかは西野も館も検討を付けていたが……

「あなたの隊長も若いじゃない」

西野は大して驚いた様子も見せずに合点がいったという風に頷く。
その言葉で十分に理解できた。南野も峰岸と同類だ。

その様子を見届けた峰岸が早速本題へと入る。

「現在こちらに移動中の部隊は南野さんの所属部隊ですか？」

その問いに南野はゆっくりと首を横に振った。

「残念だけど違う。来ているのは陸軍第二十五歩兵連隊と第十五機
甲大隊よ」

「陸の精鋭を惜しげもなく投入とは軍部は気合入ってますね」

「というのは表向き、一応私の所属する隊からすでに一人、こっち
に来ているわ……少し人格に問題のある人物なのだけど」

峰岸の目から見ても、ここまでげんなりした様子の南野は珍しい。
よほど嫌なのだろう。

「厄介者を押し付けられた訳ですか」

「平たく言えばそなるわね。悪い子ではないんだけど、天真爛漫過
ぎるというか。自分の欲求に忠実というか。良くも悪くも正直者ね。
今だっでどこで油を売っているのやら」

不機嫌そうな表情の南野を峰岸は苦笑いを浮かべて見守る事しか
出来なかった。

周りに流されやすい自分をこれほど呪ったことは今回が初めてだろう。憔悴と言えなくも無い表情で生活エリアに星の数ほどある喫茶店の中でアイステイーを啜る佐世保は一人ではなかった。

なり行きとは言え何故自分は先ほどの少女と喫茶店などで相席しているのだろうか。当初は彼女の仮想戦闘をモニター越しに見るだけの話だったが、彼女の戦闘スキルは思いのほか高かったのだ。単純な近接戦闘においては僅差で佐世保に軍配が上がりそうではあったが、他のスキルは少女の方が数段上だった。射撃技術も、スニーキング（隠密行動）もその他のスキルもだ。

結果自分の口から言えることは何も無いと結論付けた。少女にその旨を伝え適当に褒めちぎり、立ち去ろうとする佐世保だったが、少女の泣き落としのような「少しお話がしたいだけです」という台詞に微妙に母性が刺激されてしまったのか思わず「じゃあ」等とその要求を呑んでしまったのだ。

そう言えば関西戦技にいた頃、諜報クラスの友人に聞いたことがある。最初に絶対に断られると思われる様な大きなお願いする。相手は当然断る。しかしそれは織り込み済みなのだと。

断った相手は断ったことに対して微妙な罪悪感を感じるらしい。そこで、それじゃあ等と妥協的なお願いをされると意外にに応じてしまう人が多いのだと。

さらに、一度応じてしまうと相手は今度は応じてしまった事で次

のお願いを断りにくくなるらしい。徐々にお願いを大きくされ、最後には当初自分が断ったお願いを聞かせてしまうのだと。

まるつきり今の自分だった。関西戦技時代の友人よ。せつかくの忠告を生かせずに申し訳ないなど感傷に浸る佐世保に目の前でパフェを頼張る少女が声を上げた。

「美味しいですね。この『シェフが腕によりをかけて作ったサクサクチョコレートランチのジャンボフルーツパフェ』っていうの」目の前には先ほど仮想戦闘場で出会った少女が嬉しそうに、痛々しいといえなくも無いネーミングのパフェを頼張っている。メニューを広げた瞬間、目の前の少女には絶対に知られたくない事だが、実は少女が食べている『シェフが腕によりをかけて作ったサクサクチョコランチのフルーツパフェ』は佐世保が密かに目をつけていたが、頼むのを躊躇していたメニューである。

佐世保の心を一気に驚掴みにしたジャンボフルーツパフェ（長いので省略）の正式名称は頼むのにかなり勇気が要りそうなものだった。

自分には無理だ。過去に入ったハンバーグ店で『当店のスタッフが生をそろえてオススメするハズレなしのスペシャル日替わりランチ』という物を頼んで店員に笑われたのが意外に深い心の傷になっていたらしく、佐世保は目をつけていたパフェ（長いので更に省略）を頼む事を躊躇していた。しかし佐世保が恥じらいを捨てた選ばれし者のみが食べる事を許された至高の一品と位置づけたパフェは目の前の少女により簡単に注文されてしまった。

無難にアイステイーを頼んだ佐世保の後につづき、その少女は事もあるうか、

「ブレンドと15番のデザート下さい」

などと佐世保の葛藤全てを台無しにする事を言った。佐世保はメニューを広げ、デザート欄を確認する。すると「シェフが腕によりをかけて作ったサクサクチョコレートランチのジャンボフルーツパフェ」という長い名前の前に？という番号が振ってある事に遅ま

きながら気が付いた佐世保は何に對してとははつきり言えないものの、なんだか色々と恥ずかしくなった。

「そうだ。私の名前まだ言っていないませんでしたね。藤村ふじむらです。藤村ゆかり。先日この学校に転校してきたばかりなんです」

その言葉にピンと来た。

「って事は石渡先生に怪我させた転校生って」

「まあ結果的にはそうなりましたけど、あれは別に……」

「ばつが悪そうに言う藤村を、佐世保はまじまじと見つめてしまう。あんたの後に検査を受けたのがうちや。結局成り行きで案内してくれた鎮圧部隊の部隊員とやりあう事になったんやけど……そうか

あんたが、石渡先生褒めとったで、天才とか何とか」

事実を口にした佐世保だったが、その言葉を聞いた少女は面白く無さそうな顔になる。

「天才？冗談でしょ。あの人こそ天才ですよ。て言うより化け物じみてますよ。あの石渡って教官」

佐世保の見立てではこの藤村と言う少女はかなりのお調子者だと分析していたのだがどうやら違ったらしい。

「どう言うこと？」

分からなかったので素直に聞いてみる。

「私、あの石渡って人との模擬戦に備えてその日の朝からあの演習場で待ち伏せていたんです。顔にドーラン塗って服装は砂地迷彩の戦闘服を着てって」

事もあるうか、彼女は石渡の隙を付こうとしたのだ。

「なんつつ無茶を……で結局どうなったんや」

「私自分で言うのもなんですけど、擬態にはかなり自身があっただです。遮蔽物が無かろうが隠れるところが無かろうが、よっぽど目を凝らさないと気が付かないくらいには上手く出来るんです」

そのことは先ほどの仮想戦闘で知っている。モニター越しに、佐世保が思わずお前はカメレオンか、と突っ込むくらいの擬態率だった。木々の間、草むら、石の転がる地面などなんにでも溶け込む彼

女の擬態能力の高さには驚きを通り越して呆れた。息を殺して相手が近寄るのを待ち。奇襲で個別に撃破して行くのが彼女の戦闘スタイルだというのがその姿から読み取れた。

「で、奇襲したんか？もしかして」

いくら実戦を想定しているからと言って教官に奇襲をかけるのは果たしてどうなのだろう。目の前の少女なら恐らくやるであろうという結論は九九の計算よりも簡単に導き出す事が出来るのだが。

「当然です。奇襲しました。もうバッチリと」

予想通りの反応をどうもありがとう。と思わず言いそうになった佐世保は慌てて口を噤む。

「でも返り討ちに合っちゃいましたよ。後ろから仕掛けたのにまるで見えてるみたいな反応でしたよ。あのオヤジ」

「おやじ……？」

石渡が聞いたら一番怒りそうな言葉である。

「擬態は上手いけど、仕掛ける瞬間がお粗末だからそこで対応できるって……その一瞬で対処できる人間なんてそうそういませんよ！どんな反射神経なんですかあのオヤジ！」

「確かに化け物やな、でもあんただとしたら石渡先生にいつ怪我させたんや？」

そう聞いた佐世保に対して藤村はいっそう面白くなさそうな顔になる。

「勝手に怪我したのよあの人」

「へ？」

「私の奇襲に対処するときに無理な動きをしたらしくてなんかこう

……グキツと」

「グキツと……？」

そう言えば、怪我をしたとは言ってたけど。させられたとは一言も言ってなかったなと今更ながらに思い出す佐世保。

「その上、『此処が戦場のだ真ん中だったらあたしこの怪我が原因で死んでるかもしれないわ。貴方の本意じゃないかもしれないけど、

あたしは貴方に遅れを取ったことになるわね。もう行っていいわよ。久しぶりに面白い子に会えたわ』ですって？馬鹿にしてる。絶対馬鹿にしてる！！」

「あの、もしもし……」

言葉遣いが変わりつつある藤村を引き戻すべく佐世保は声を掛ける。

「はっ！すいません。カッとなっちゃってつい……。そ、そう言えば、ええと」

佐世保の顔を見ながら困惑する少女。ここでようやく佐世保は自己紹介が済んでいないことに気が付く。これは相手が名乗ったから自分も名乗るのだ。決して雰囲気にならされてとかそう言うのではない、と自分に言い聞かせつつ。

「佐世保佐瀬穂や。好きに呼んでくれたらええ」

「好きに……エヘエ」

言ってから後悔した。全身を悪寒が駆け巡る。

「それじゃあ。佐瀬穂ちゃんって呼んで、いい」

あれ意外と普通じゃないかなどと思いながら。了承の意を示す。

「佐瀬穂ちゃん。初めて女の子の事名前で呼んじゃった。うへええええ」

虚ろな表情でそんな事を言う藤村は何か、物凄く気持ち悪いのは言うまでも無い。彼女の脳内で何が行われているのか佐世保には推し量ることも出来ないのだが、数秒の内に妄想を終えたのか普通通りの表情に戻った藤村が体ごと後ろに引いている佐世保に言う。

「そつえば、さ、佐瀬穂ちゃんは鎮圧部隊の人とやってたって言うていたよね。その人強い」

佐瀬穂ちゃんのあたりから顔がにやけ出した藤村だったが、何とか暴走はしなかったようだ。

「ああ、なんか強かったな。うち前の学校では警備隊に入ってたんやけど、多分その隊長より強かったんちゃうかな。やっぱ中央

はレベル高いわ」

「警備隊って関西の？あその隊長ってたしか……」

独り言のように呟く藤村に佐世保が首をかしげた時、携帯の着信音が響いた。佐世保のものではない。ポケットをまさぐり、携帯を取り出した藤村が、発信者の名前を確認した途端顔を顰めた。渋々といった様子で通話ボタンを押し携帯に出た。

「も、もしもし

今、喫茶店です。

- あっ！隊長聞いてくださいよ。私初めて中のいい子が

はい、ええ、そうです。その通りです。すいません。え？それって……はい、すぐに行きます」

話の内容は分からないが、なにやら深刻な事態なのは彼女の顔の動きで佐世保にも分かった。

「なんかあったんか？」

携帯をポケットに戻す藤村に佐世保が聞く。その問いには答えずに、藤村は伝票を取って立ち上がると佐世保に申しわけなさそうに笑いかける。

「佐瀬穂ちゃん、ごめん。私急用が入っちゃって。そうそう、今日は早く帰った方がいいよ」

「え？それってどういう……」

いい終わる前に彼女はさっさと歩いてレジへと向かってしまった。「何かある」

電話を受けてからの藤村の様子からそんな事を感じ取った佐世保は自身の好奇心が膨れ上がるのを感じていた。詮索好きは嫌われるのは知っているが、何かあると気が付いた上でそれを放置するのはもったいない。となれば、後はやる事は一つである。

佐世保は藤村に少し遅れて店を出ると彼女の尾行を開始した。

そろそろ色々動いてください（後書き）

とにかくこれからどうしようか。それが問題だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0098t/>

僕が僕である為に

2011年9月12日03時38分発行